特275
94

始

特275
94

東京帝國大學圖書之印

中里介山著

大菩薩隴峠

大菩薩峠刊行會

東京帝國大學圖書之印

豐太閤

農奴　　無名氏筆

大菩薩峠

第十五册

本冊內容

農奴の卷
大菩薩峠梗概

序文

大菩薩峠は明治の末に起稿し大正の初に發表し昭和の今日に至りて猶ほ未だ完結せず、實に人類あつて以來の長篇小說也、抑も著者がこの尨大なるカンバスを用ひて描かんとする處の本意は「衆生業相ノ展開ヲ曲盡シソノ遊戯神通ヲ寫シテ入曼陀羅ノ實相ニ歸スル」にあり、この故に世の所謂藝術文學並に大衆文學とは根本に於てその性質を異にす。

新定版緒書

大菩薩峠は從來菊半截形の普通本が定本のやうになつてゐたが、長い間に形がチグハグになつたり、卷數が缺けたりして、折角の注文に間に合ひ兼ねたりした事もある。今度、形裝を改めて十五册を一度に揃えて、此の「新定版」を出すことになつた。この機會に組直しその他大革新を行ひたかつたが、何を云ふにも今日の非常時局の統制時代であるから、用紙その他以前よりも劣るものあるは已むを得ないけれども、これでも讀者諸君に奉仕し得る最良を盡したものであるといふことを御諒察願ひたい。なほ、その折々の卷頭言や、卷末に附した「是非」の類は此の際一切取り除いたが、これは別册にまとめて世に頒つつもりである。なほ今まゝの菊半形のものも引續き讀者諸君の爲に備へて置く筈である。それから從來大菩薩峠刊行會の經營には變化もあり行違もあつたけれども、この時局に鑑みて舊緣を復し、著者と神田豐穗君と融和の下に野口兵藏君が事務に當ることになつたことを書き添えて置く。

昭和十四年四月

同　人

三十八　農奴の巻

一

近江國、草津の宿の矢倉の辻の前に、一ッの「晒らし者」がある。

そこに一個の彈丸黑子が置かれてゐる。往來の人は、その晒し者の奇怪なグロテスクを一目見ると共に、その直上に立てられた捨札を一讀しないわけには行かぬ。その捨札には次の如く認められてあります。

> この者、農奴の分際を以て恋にてうさんを企てたる段不埒につき三日の間晒らし置く者也。

この捨札を前にして、高手小手にいましめられて、晒らされてゐる當の主は、知る人は知る、宇治山田の米友でありました。

彼が、この數日前、長濱の夜を歩いた時に思ひもかけぬ捕手と、だんまりの一場を演じたことは、前册（大菩薩峠第十四册）の終のところに見えてゐる。その米友が、今は脆くもこの運命に立ち至つて、不憫や、この東海道の要衝の、晒し者として見參せしめられてゐる。

彼は、今や彼相當の觀念と度胸とを以て、一語をも語らないで、我をなぶり見る人の面を見返してゐるから、その後の委細の事情はわからないながら、右の簡單な立札だけを以て一應要領を得て往く人も歸る人もある、處が、此の捨札の意味が簡にして要を得てゐるやうで、實は、漠として摑まへどころがないのです。

抑も「この者、農奴の分際」とある、農奴の二字が、わかつたやうで、よくわからないのであります。事實、日本には農民はあるが農奴といふものは無い、內容に於て史實なり現實なりをたゞして見れば、それは有り過ぎるほどあるかも知れないが、族籍の上に農奴

として計上されたものは、西洋にはいざ知らず日本には無い筈であります。だが、往來の人は、別段この農奴の文字には咎め立てをしないで、

「はゝあてうさん者だな」

「成程てうさんでげすな」

「てうさんおますさかい」

「ふ、ふ、ふ、てうさん者奴が……」

などと云ひ捨てゝ通るものが多い、それによつて見ても、農奴の文字よりはてうさんの文字が四民の認識になじみが深いらしい、

てうさんと云へば、すでに、はゝあ、と何人も卽座に納得が行くやうになつてゐる、その一面には、農奴は農奴でそれでもよろしい、てうさんに至つては、赦すべからざるもの赦さるべからざるもの、てうさんの罪なることは、まさにこの刑罰を受くるに價すべくして、免るべからざる適法の運命でもあるかの如く、先入的に通行人の頭を不承せしめて、是非なし、是非なしと、あきらめしむるに充分なる理由があるものと解せられてゐ

るらしい。
然らば てうさんとは何ぞ、

二

てうさんは卽ち「逃散」であります、現代的に讀めば「とうさん」と讀むことが普通である、逃をてうと讀むことゝとうと讀むことだけの相違なのです。これを訓讀すれば、「逃げ散る」といふの外はない。

そこで農奴なる分際のこの晒し者は、「逃散」の罪によつて、こゝに此の刑に處せられてゐるといふ觀念は明瞭になりましたが、それはたゞ、捨札に表はれてゐる文字だけの意味の事であつて、これを本人の方より云へば、宇治山田の米友が、こゝで、どうして「農奴」といふ身分證明の下に、更に「逃散」といふ罪名を以て、今日この憂目を見なければならない事態に立ち至つたのか、その觀念に至つては、明瞭なるが如くして、未だ甚だ明瞭を

缺くのであります。

米友が、賤民階級に生れ出でたといふことは、本人自身も隱すことはしない、併し乍ら農奴といふ身分を自稱したことも無ければ、未だ嘗て他稱せられたこともありません、矢張り米友とても農業の事を働かせれば働らきます、伊勢の拜田村では、宇治橋の河原へ森ぎに出る間は自宅で相當の百姓仕事をやつてゐたのです、現に、伊吹山の王國では、お銀樣の支配の下に、ついこの間まで、極めて僅少の時間ではありましたけれども、鍬をとつて、あらく切りなどを試みてゐた位ですから、やつてやれない事は無いのですけれども、特に農奴といふ戸籍に數へられてゐたわけではない。

それから、また「逃散」の罪は、盜みの罪ではない、殺しの罪でもない、大抵の場合に於ては、逃げるとか、走るとかいふことは、本罪では無くて、云はゞ副罪といふことになつてゐる。卽ち、殺しをし、盜みをした事等の爲に、現地に安住が爲し難くなつて、それから他領他國へ——或ひは天涯地角へ逃げ走る——といふことが順序になつてゐる、他領他國へ逃げ走らんが爲に、殺しをし盜みをするといふことは無いのです、はたまた、殺しで

も無く盗みでもなく、人の大切の妻女と合意の上で逃げるといふ事體に於てすらが、その目的は逃げることが本意では無く、現住地では越ゆるに越えられぬ人爲のいばらがあればこそ、彼等は手に手を取つて逃げるのである。

もし、罰するとすれば、やはり殺しに於ける、盗みに於けると同じやうに、私通であり姦通であり、その事に罰せらるべくして、逃散その事に罪があるべき筈が無いのです。

然るに、此の場の咽し者は、此等の何れもの罪科に適合せずして、ひとり「逃散」が罪になつてゐる。「逃げ走る」こと、或は逃げ走つたこと、だけが罪となつてゐる。觀念が甚だ明瞭なるが如くして、不明瞭なるものではないか。

にも、拘はらず、通るほどの人は、いづれもそれに默會を與へて過ぎ去る、

「てうさんか——」

「てうさんでは已むを得ない」

「てうさんでは、どないにもならんさかい」

畢竟するに農奴なるが故に「逃散」が罪になるといふことは、當時の常識に於て、ほゞ納得せられてゐるらしい。

然らば、農奴なる者に限つては、殺しもせず、盗みもせず、私通も、姦通も行はずして、云はゞ、何等の罪といふべきものが無くして、たゞ、單に「逃げ走る」といふことだけが罪になるのか。

事實は、まさにその通りなのである。罪があつても無くても、逃げるといふことがいけない、逃げるといふことが罪になる。

三

伊吹の上平館の新館の庭の木立で、二人の浪人物が、木蔭に立ち迷ひながら、語音は極めて平常に會話を交はしてゐる。

「ありや、身内のものなのです、土地つ子ではありません、ですから此の土地へ來て農奴呼ばはりをされる籍も無ければ、てうさんの罪を着せられる因緣が全く無いのです」

と云つてゐるのは外ならぬ元の不破の關の關守氏、今やお銀樣の伊吹王國の總理です、そ

れを相手に受けこたへて云ふ一人の浪人物、

「左樣でせう、數月前、拙者の寓居を晉づれてから、間も無い出來事なのです、あの者が此の土地の者で無いことは、拙者もよく存じて居りました、然るに此の土地の農者としてあの男一人がてうさんの罪を被たといふ所以に至つては……」

と云つたのは過ぐる日、琵琶の湖畔で、釣を試みてゐた青嵐居士その人であります、この二人の浪人物は至つて穏やかな問答ぶりでありましたけれども、その問題は、やはり農奴とてうさんとの上にかゝつてゐる、即ち草津の宿の晒らし者の事に就て一問一答を試みてゐるのであります。

「ちよつと想像がつきません、洗つて見れば直ちにわかる身の上を、故らに誣ひて、彼を此の土地の農民拔ひにして、さうして、てうさんの罪を着せて、晒らし者にしたといふことの處分が、どうも飲込めないのです」

と不破の關守氏が、青嵐居士への受け答へと共に新たなる疑問の主題を提供する。

「それは、ある程度まで想像すれば出來る、またそれを眞正面から見ないで、反間苦肉と

して見れば、政策的に時にとつての魂膽がわからない限りでもございませんがね……」

と青嵐居士透かさず相受ける、即ち不破の關守氏は、宇治山田の米友が突然あゝしててうさんの罪を着せられて晒らされた事の由に相當、面食つて、その理由内狀のほどが、さつぱりわからないといふと、青嵐居士は、その點は多少想像を逞うして、魂膽の程をも見拔いてゐるところがあるに似てゐる。

「左樣でござるかな」

「左樣――あの男とは、先日偶然の緣で、長濱の湖畔で對面しましてな、それから拙者の寓居まで立寄らしめたといふ因緣がござるが、その節彼は夜分にもかゝはらず、振切つて町へ出て、それから遂にあの始末です、その間の事情を、人傳に聞いて見ますと、成程と思はれない事情を含んでゐないといふ限りもございませぬな、あれは一種の人身御供なのですな、當人から云へば、馬鹿々々しい人違ひの罪科で、代官の方から云へば、怪我の功名ではない、功名の怪我をそのまゝ、お囮に使つたといふ次第であらうと想像するのです。」

「成程」

青嵐居士が、粘液的に話しぶりを引出すと、不破の關守氏は、他意なく傾聽ぶりを示すのであります。

「後で土地の人に聞きますとあの晩、思ひもかけぬ物凄い一場の場面が、深夜の長濱の街上で行はれたさうです、傳うる處によりますと、あの小男はあれで、勇敢無比なる手利であるさうですな、捕方に向つた一方も、その方では名うての腕利きであつたが、すでに危かつたさうです、卽ち、さしも腕利きの捕方も、すでにあの小男の一擊の下に危ない運命にまで立ち至らせられたものらしいが、半ば以下、形勢が急轉して、難なく縛についたものらしい、つまりあの小男は、最初のうちは、自分に疚しい處が無いから、理不盡の取押方に極力反抗したけれども、相手がわかつてもわからなくても、兎に角、正當の職權を以て來てゐるのを認めたから、是非なく縛についたと云ふ落着らしいのです、處で縛りは縛つて見たが、つれて來て糺問して見ると何等の罪が無い――」

四

「はゝあ、わかりました」

不破の關守氏は、青嵐居士からの一くさりを聞いて相當の頓悟があつたらしく、二度ばかり頷く、

「罪の無いものに刑は行へない、刑を行はんとすれば、相當な罪をきせてかゝらなければならん、そこであの先生その政策に引かゝつたのだな」

「さうです、時節がら、農民おどしの案山子に決められたといふ魂膽なのでせう、案山子として使用するには、不幸にしてあの男は恰好の條件を備へてゐたものと認められる」

「ありさうな事です」

二人はこゝで、合點して多少の思案にうつりました。

二人の結論では、宇治山田の米友が、草津の辻で、あゝ云つた運命に落されてゐるのは、要するに、時節柄、農民おどしの爲めの案山子として使用せられてゐるのだといふことの

推想と斷案とに敢て異議がないものゝやうです。

かりにさうだとして見ても、かういふ事をして、あの一人の若者を案山子に使用せねばならない時節柄の、農民の問題の急務といふことについては、相當の豫備智識が無ければならない。

即ち、かういふやうな時節柄であつて、もし、あやまつて土地つ子の一人二人をでも捕へて刑に當て行ふ段になると、反動を增すばかりである、それを切かけに暴動を誘發するやうなものである。

さう云ふ場合に於ては氏も素姓もわからない風來者を捕へて、人身御供にして置けば、人氣を反らして、群集を煙に捲くことも出來るといふものである。その意味の案山子としての使用物件には、米友公あたりは恰好の代物と目をつけられたものらしい、さうなると、案山子に使用せられた彼が運命こそ不幸にも氣の毒至極のものと云はなければならぬ。

宵嵐居士は、かねて長濱にゐてお銀樣一黨の行動を噂に聞いてゐた、ぜひ、一度會つて見たいと、米友にまで、それを言葉に現はしたことがある、その機緣が、もう熟して、こゝで二人が對面してゐる、この二人の智者が對面して、談、米友の身の上のことに及んでその立場がほゞ明瞭になつて見ると、あれをあのまゝで見過して置くわけには行くまい、すでに、あれをあのまゝで見過ごさないとすれば、二人の話題は進行して、如何にして、あの男を救擠せんかにある。

あの男を救擠せんとするには、代官を相手にしてかゝらなければならぬことが、當然わかり過ぎるほどわからなければならぬ。そのお代官も公儀お代官なのである。德川幕府直轄の天領お代官といふことになる。

して見れば、二人が打ち揃つて、おとなしく「賈ひ下げ」運動でも試みやうとするやうなそんな甘い手では行くまい——だが、多數を卒ゐて示威運動などは此の際、なほ惡い——と觀念して見たり、或ひはまた他に別の手段方法を試むることにでもなるか、いづれにしてもこの二人の智慧者が底を割つた以上は、あの寃罪の晒らし者を、あのまゝで置くわけには行くまい。

五

德川時代の法によると「晒らし」といふものは、大よそ三日間を定例とする、三日間を生きたまゝで、晒らして置いて、それから生命を取るといふ段取りになつてゐる。その生命を取る方法には、首斬りもあれば鋸引きもある。そのうち、坊主だけは、たゞ單に「晒らし」だけで生命は取らない、苟も出家の身として「晒らし」にかゝることは、生命を取る以上の刑罪に價すると認められたのかも知れない。いつの何の頃の大臣の如く、七年も八年も、晒らし同樣の憂き目を見せられた上に、更に二年も三年も實刑を課せられるといふやうな深刻な例は、德川時代には無かつたらしい。

して見ると、あだしことはさて置き、宇治山田の米友も、出家でない限り、俗人である限り、三日間斯うして晒らされた上は、生命を取られることに運命が定まつてゐる、とすれば可哀相ではないか。

當人は、この運命を自覺してゐるや否や、物すごく沈默したなりで、決して口をきかない

役人番卒が何と云つても口を利かない、見物が何と云つて罵つても口を利かない、

斯うして、いよ〳〵二日間完全に晒らされてしまつた、明日は三日目の「晒らし」である、明日が終れば、「晒らし」の方はこれで御ゆるしになるが、その代り生命の方を召されてしまふ。

さて、斯うして二日間、誰一人助けに來やうといふ者はない、貰ひ下げを歎願に來やうといふ者もない、また、多數の威力でデモを以て奪還を試みやうとする勇氣もない。

それも亦その筈です。この「晒らし」者に限つて、處番地といふものが更にわからない單に「農奴」としてあるだけで、何の郡の何村の農奴に屬するのだか、その人別が書いてない、書いてないだけではない、事實、何れの村の農奴だか、この騒ぎの中で、誰一人、見知つたものが無いのだから、徒らに面食ふのみで、同情を表したくも表するきつかけが無い。

そこが、また役向きの見つけどころかも知れません、

さて、その日の夕方になると、縛られてゐる米友の前へ、二人のひにんがやつて來て無

遠慮に穴を堀り出しました。三尺立方の眞四角な穴を堀りにかゝりました。

「おい、兄い、よく見て置きな、明日になると、お前のその笠の臺と、胴體とが、上と下への生き別れだよ——首が落こつても痛くねえやうに、土を和らかに堀りふくらめといてやるぜ」

と、ひにんが小聲で戯れに晒らし者に云ひかけました。

それを聞いていゝ心持がする筈はない、新聞紙上には議會が自らの墓穴を堀る、墓穴を堀るのといふやうな事がよく出てゐるけれど、文字として無雜作に扱う分には何でも無いが、墓穴といふものを目の前で堀られる心持は決していゝ心持のするものではあるまい。

米友は、それを默つて聞き流しました。敢て一言のタンカを切るでも無く、むじつを訴へるでも無い。明日は、此の穴の中へ、自分の素首が斬り落されて、文字通り、身首處を異にする運命をまざ〳〵と見せつけられながら、米友は何も云はない。

非人が二人で、三尺立方の穴を、ほとんど堀り上げてしまつた時分に、通りに林立してゐる見物の群集の中に、

「あつ！」

と思はず、口へ手を當てゝ、面の色を變へてこの「晒らし」を見直したものがありました。

六

この男はキリ、とした旅慣れたいでたちで、三度笠をいたゞいてゐたが、人混みにまぎれて物好き半分、此の「晒らし者」を一見すると卒倒するばかりに氣色ばんだが、やゝ落ついて、

「どうしたと云うんです、ありやあ」

そつと、さゝやくやうに、傍らの人に問ひかけたものです、」

「てうさん者ですよ」

「てうさんてのは……」

「つまり、百姓一揆でござんすな」

「あれがですか、あの男が百姓一揆なんですかね」

「へえ、あれ一人が百姓一揆と云ふわけぢやあございませんな――やつぱり一味徒とうの一人なんでしてな」

「あれが……」

「左樣でござんす、一味とゝうのうちでも、てうさんを企てた最も罪の重い奴ですから、それであの通り「晒らし」にか、りました、明日あたりは打首といふ段取りでござんせう」

「冗談ぢやあない――あれが、あの男が此の土地の百姓なんですか」

「さうですなア、さればこそ、あゝして「晒らし」にかけられるんでげさあ」

「嘘をお云ひなさんな」

あはたゞしい旅の男が、問答者を相手に、氣色ばんで、

「嘘を、おつしやるな、ありやあ、此の土地の者ぢやありませんぜ、あの男は、此の國の百姓ぢやござんせんぜ」

「でも農奴と書いてござんすぜ、捨札をごらうじろ」

「何を書いてあるか知らねえが、あの男は此の土地の百姓ぢやあねえ、大違えだ」

「お前さんの御親類かね」

「馬鹿にしちやあいけねへ、お前さんこそ、あの男が、百姓だと頑張りなさるんなら、人別を云つてごらんなさい、何處の何といふお百姓さんだか、それを云つてごらんなさい」

「そりや知りませんなア、わしや、やつぱり通りが、りの者でござんして、人別改め役ぢやござんせんから」

「ぢや、何と書いてあるか、讀んでごらんなさい、處番地が何と書いてあるか、讀んで聞かせてお呉んなさい」

「それが、只、農奴だけで、處も番地も、名前も記しちやあござんせん」

「そうら御覽なせへ、あんな百姓があるものか」

「あれが百姓でないとおつしやるお前さん、ではありや何者なんです、御承知なら聞かして下さい」

今度は、たづねられた方から逆に反問と出かけられると、たづねた方が、やつぱり相當に昂奮して、

「あの男は、ありやあ、やつぱり旅の者なんだ、つい此の間まで江戸にゐた男なんだ、それがお前さん、どうして此の土地へ來て百姓一揆に加はる暇があるもんか、人違ひだあね人違ひだよ」

「へえ――」

「人違ひで「晒らし」にかゝつちやあたまらねへ、あいつも亦、そんならそのやうに何とか云へばいゝぢやねへか」

「江戸の方なんですか」

「さうだとも、生れは何處か、よく知らねへが、つい此の中まで永らく、江戸に住んでゐて、こちとも附き合ひがあるんだ、あいつが、どう間違つて、江州くんだりまで來て、百姓一揆に加擔するなんて、物好きにも人違ひにも方圖があらあ、人違ひだよ、間違ひだよ――晒らされる奴も、晒らされる奴だが、晒らす奴も晒らす奴ぢやあねえか」

こゝまで來ると、右の江戸者らしい旅の男はいよ〳〵昂奮して、舌なめずりをして見たが急に、自分の昂奮ぶりと、物の云ひぶりが、つい知らず度外れになつてゐたと氣がつくと

あはてゝ自分で自分の口を押へながら、忙がはしく左と右を見廻しました。

七

成程、さう氣がついたのも道理で、この旅の者の物言ひぶりが、あまり際立つたので、誰も誰もが、晒らしを見る眼をうつして、此のひとり昂奮した旅の者の方へ集中させられるのですから、はつと氣がついたのですが、それにしてもこの旅の者が、一方ならずテレたり、怖れたりする容子が變です。

あんまり自分の物言ひぶりが過ぎたと感じ、彼はテレて、こつそりと口を押えたまゝ人混みに紛れやうと試むるらしい時に、その後ろにゐた千草の股引をはいて、菅笠をかぶり、腹掛をかけたのが、ちよつと後ろから、すがるやうにして、

「もし」

と問ひたゞしたものです。

「エ」

呼びかけられて見ると、挨拶をしないわけには行かなかつたが――挨拶といふより寧ろ捨ぜりふで逃げ足と見えたのを、千草股引が、また食ひ留めにでもかゝるもののやうに、押し迫つて、

「あんたはん、あの晒らしの男は、此の土地の百姓ぢやあないとおつしやいましたか」

「え、その何ですよ――さうです、さうです、たしかに人違ひなんですよ」

と云つて、やつぱり振り切るやうに急ぎ足になるのを千草股引は、遽かさず追ひかけるやうなこなしで、

「お手間は取らせませんが、そこで一つ、お聞き申したいんですが、あんた樣あ、あの者の身性をよく御存知なんですか」

「そりや、知つてると云へば知つてるがね、さう云つて、わつしにおたずねなさる、お前樣は、どなただね」

「わしは――あの男の身性を知りたいんでして」

「あの男の身性を知りたければ、係り役人にお聞きなせへな、さうで無ければ、直接、御當人に聞いて見なせへな」

「お役人は恐いでしてね、あの御當人は、根つから口を割らねへんださうでござんしてなところで、あんたはんは、どうやらあの「晒らし」の身性を御存知らしい、ぜひ、教へていたゞきてへ」

全く、その千草股引は、此の旅の男を逃がすまいと、疊みかけて問ひかけるのを、こちらは非常に迷惑がり

「お上役人も、當人も知らねへものをこつちが知るかなあ、たゞ、ちよつと、見た樣な事があるやうな氣がしただけなんだ、何も知りやあしねへよ、先を急ぐから、まあ、この位で御免なせへ」

旅の男は、もう全く逃げ足で走り出さうとする、つまり、一時の昂奮から、心にも無い事を口走つたことを悔ゐ、こんな事から、變なかゝはり合ひになつてはつまらない――と素早く、この場を外してしまはうとする物ごしでした、それと見て取つた千草股引が、急に權高くなつて矢庭に飛びかかつて參りました。

「待ちろ――逃げちやあいけねへぞ」

「何を……」

むんづと、飛びついて來た千草の股引は、これは只の股引ではありませんでした。充分に腕に覺えのある捕手の一人でした。腕に覺えのあるべきのみならず、前のいきさつを知つてゐる者は、たしかに面にも見覺えがあるべき筈です、これぞ長濱の夜中の捕物に、現に此處に見る宇治山田の米友ほどのものを取つて押へて、ここへ見事晒らしにかけるまでの手柄を現はした、あの夜の名捕方――轟の源松といふ勘定奉行差廻しの手利きでありました。

それに飛びかかられた旅の男――もう四の五もない、ぱつちにかかつた雀のやうに、おつかぶされたかと思ふ、

「何を、田舍岡引きめ、しやらくせへ眞似をしやがんな」

武者ぶりつかれて却つて、度胸が据つたらしい旅の男――窮鼠猫を嚙むといふよりも、最初に猫をかぶつてゐた狐がここで本性を現はしたといふやうな逆委勢となつて

「まだこんな處で手前たちに年貢を納めるにや早えやい」

そこで、又しても一大格闘がはじまつたかと思ふ間もなく旅の男の風合羽がスルリと解けて千草股引の頭の上からかぶさりその間に股の間をスリ抜けて、一散に逃げました。

「失策つたー」

さすがの名捕方に空を摑ませて、身を躱したその素ばしつこさ、同時に摺り抜けて走る、その足の迅い事――ここに至つて、只のむじなでない事の面目が、群集をあつ！と云はせる。

八

捕り逃がした、名捕方の轟の源松は歯噛みをしました、事實、こんな筈ではなかつた、有無を云はさず引括り上げるつもりであつたが、相手を甘く見すぎたのか、さうではない相手が全く意表に出でたからである。意表に出でたと云つても、凡そ、悪いことをするやうな奴は、何時でも人の意表に出でなければ立ち行かない商賣なのだから、人の思ふやう

な壺にばかりはまつてゐた日には、悪黨商賣は成り立たないのだから、さういふやからを相手に一枚上を行かなければならない捕方連が、不用意とは云ひながら、さう甘い手を用ひた筈は無いのに、殊に、先頃は、こゝに見る、宇治山田の米友をすら、あの目ざましい活劇の下に、最後の鍵繩を相手の裾に打ち込んで首尾よくからめ取つたほどの腕利きが、こゝで、こんなに無雜作にカスを食はされるとは、氣が利かな過ぎるといふものであるが――それには、それでまた理由もあつて、實は最初

「待ちろ――逃げちやいけねへぞ」

と居直つた時に、此の捕方は早速に相手の利腕をむんづと掴んだつもりでした。ところが掴んだつもりの相手の利腕を掴みそこねてしまつたのが意外です。自分ながら腕の狂ひ方の激しいのに一時、あつとしたが、その掴んだ手ごたへが、さつぱり無かつたので、はつと狼狽したのも實は無理がない、合羽の下に當然、ひそんでゐなければならない右の腕がその相手の旅の男の肩の下に有り合はさなかつたのです。

それは敢て懷ろ手をしてゐたわけでもなければ、その激しい掴みかゝりを引ばづしたといふ次第でも無い、本來この旅の男には右の腕が無かつたのです、いかな名探偵と雖も無いものは掴めない、

有るべく豫期して無かつたといふのは見込違ひではない、誰でも、普通の人間である限り、この合羽の下に二本の腕がある、一方が右腕であれば一方は當然左腕であることは當識になつてゐる――ところが、此の旅の男には取らるべき利腕の右が存在してゐなかつたそこで先づ殺してかゝるべき利腕を殺すことが出來ないのみならず、その掴みそこねた此方の破綻を透かさず泳がせて置いて、間一髪に摺り拔けてしまつたといふ早業になるのです――摺り拔けた途端が、すでに走り出した事になる、摺り拔けるのも鮮やかなものだつたが、その逃げつぶりがまた一層あざやかなもので――敵も味方もあつと云つて、思はず胸を透かさせたといひつべき切れつぶりでありました。

こゝまで云てしまへば、當然この素ばしつこひ摺り拔け者が、がんりきの百藏といふ名代のやくざ野郎に外ならないことは、定運は皆感づいてゐない筈はないのであります。

果して、がんりきの百の野郎は斯くの如くして此の場を走り出しました。

一方、名探偵の轟は、一先は不意を食つて泳がせられたものゝ、これをこのまゝ口を開いて見送つてゐる男ではない。

斯くて。白晝、意外な捕物沙汰が、海道を驚かしてこの事のセンセーションの爲に、「晒らし」そのものゝ場は閑却されたのみならず、「晒らし」見張りの役人非人までが、轟親分の捕方の方へ氣を取られて、バラ〳〵と走り出したといふ亂脈になりました。

九

悠々と八景めぐりをして、大津の旅籠へ戻つて來た、女輕業の親方お角は、戻つて見ると思ひがけなくも甲州有野村の伊太夫から、たよりのあつたのを發見して驚きました。

伊太夫は卽ちお銀樣の父である、自分はこの人からお銀樣の附添並監督を仰せつかつて來たものである。

その大旦那樣が、どうしてまた急に、こつちへお出むきになつたのか知ら、何にしても、これは取るものも取り敢へずに、本陣へお伺ひをしなければならないと、伴の者共に、そのまゝ折返して外出を云ひつけてから鏡に向つて、身なりを直し髮を掻き上げたのも女の身だしなみです。

抑も、お角が、斯くもゆる〳〵と、八景めぐりをして道草を食つてゐるのは、一つには膽吹へ道を枉げた道庵先生を待ち合せの爲であつたのですが、その先生は、どうやらまた脫線したらしく、まだ何等のたよりも無いところへ、有野村の大盡のお越しと云ふ便りを聞いたのは、慥かに意外でした、さても自分は大盡からあれほどに信任されてお銀樣の身を托されながら、お銀樣の膽吹へ留まる事になつたのを留める由もなく、實は、自分の力では到底思ひ留まらせる事が出來ないと觀念して、しばらく、お銀樣の御意のまゝに任せて置き、またせん樣もあるべしと腹を定めてゐたのを、今こゝへ斯うして、突然に、その頼まれ主の大旦那樣に見えられて見ると、お角として、聊か面目ない次第のものがある、つまり、頭のおさへてのない、やんちや娘、下手に逆に出るよりはするやうにさせて置いて、飽きの來た時分を待つに越した事は無いと考へたればこそ、お角も、米友と道庵とを振替へて、しばし京大阪で氣を拔ひてから、またこゝへ出直しての事——と大た

い、そんな風に考へて、一時、お銀様の監督を敬遠することが最上の緩和と考へた次第なのですが、その中ばへ大旦那に來られて見ると、さて、どう復命をしたらよいか、さすがのお角さんも、その邊に、大へん氣苦勞を生ぜざるを得ないで、大旦那様に會つたらば、此の點どう申譯をしたらうかと、それをとつおいつと考へて見る。

「お角さん、お前といふ人も存外頼み甲斐のないお人だね、お前さんに限つて、娘を引廻せると信じて、お任かせしたのに、娘を膽吹山なんぞへ、おつぽり出して置いて、自分ひとり八景めぐりなんぞは、あんまり暢氣過ぎるぢやないか」

若しかして、こんな皮肉を大旦那様から聞かされでもした日には、わたしはやりきれない困つたねへ、

まさか伊太夫がこんなに急に上方のぼりをして來やうとは夢にも思つてゐなかつたお角、

差當つての當惑はかまはないとしても、いさゝか自分の責任感に及ぶとするとお角さんの氣象としてやりきれないのも無理は無い。

併し、まあ悪い事をしたわけぢやなし、やむにやまれぬ事情はお話し申せばわかつて下さることと――觀念もして、そこはかと身なりをキリ、としたが、さて出かける前に、お手水場へ入つて落ついてといふ氣分になりました。

お角さんが、お手水場を志して、何氣なく縁側をめぐつて、秋蘭の植ゑてあるお手水場のところへやつて來て、開き戸を手輕く開けて、厠草履をつゝかけて、内扉へ手をかけて、それを何氣なく引いて開く途端

「おや――」

お角さんほどの女が、こゝでまた一種異様な叫びを立てゝ立ちすくんだのが不思議千萬でした。

十

便所の内扉を開いたまゝで、お角さんが

「おや」

と云つて、異様な叫びを立てゝ、立ちすくんだも道理、その便所の中には、先客があつて

悠々としやがみ込んで用を足してゐる最中であつたからです。

「無作法千萬な！」

誰でも斯う思はなければなりません、このお手水場は、お角さんの座敷に專用のお手水場になつてゐる、そこへ餘人が入つてゐやうとは想ひもしなかつた、且又、誰か臨時に借用したにしたところが、用を足してゐるならばゐるやうに、内鍵といふものもあるし、それが利かないとすれば、咳拂ひぐらゐはしても宜からうもの、それが作法ぢやないか、わたしが此處へ來た廊下の足音でもわかりさうなものぢやないか、内扉を開けた音でも氣取れさうなもの、それを内扉を開けるまで、濟まし込んでゐて、人に恥をかゝせるのは免も角自分もこんな處を見られていゝ圖ぢやあるまい、間抜け奴！とお角は腹が立つて、出て來たら横つ面を食はしてやりたい氣持で、扉を外から手強く締め返してやらうとしたその途端に、向うに抜け〳〵しやがんでる奴——しかも女ではない男なんです、そいつが、しやあ〳〵として

「今日は」

と云ひました。

「畜生」

とお角さんは、思はず斯う云つて罵らうとしたが、そのしやがんでゐる奴の面を見ると

「何んだ、ナンダ、手前は百の野郎ぢやないか、このやくざ野郎」

お角さんの惡態は惡態にならず、全く面負けの呆れ返りの捨セリフでした。

かうして、お手水場の中に、わだかまつてゐた奴は、昔は腐れ合ひのがんりきの百藏といふやくざ野郎その者に紛れもないのですから、忌々しくつてたまらないながら、喧嘩にもならない。

「馬鹿野郎、何んだい、そのザマは」

お角さんは、續けざまに怒鳴りつけて見たまでゞすが、中の野郎は、いよ〳〵イケづうゝしく、御尻を持ち上げない、

「たまに來たものを、そんなにガミ〳〵云はずともこつちやあねえか——」

「相變らず圖々しい野郎だねへ、だが表玄關からは敷居が高くて來られもすまいねへ

臭い奴は臭い處が相應だよ」
「仰有る通り表向きには、やつて來られねへ身分だから勘べんしてお臭んなさい」
「どうして。わたしが此の宿にゐることがわかつたんだい」
「どうしてつたつて、そこは蛇の道は蛇だあな、お前がこの街道を、何處から何處へつん拔けて何處へ泊つて、どこそこから立ち戻つて、どこそこへ出かけやうといふのか、こつちぢやもうちやんと心得たものなのだ、だが、そんなムダを云ひてへが爲にわざ〳〵斯うして臭エ處に待つてゐたんぢやねえ——かういふ辛抱もして、一言お前に知らせをしてやりてへと思うことがあればこそなんだ、と云つたところで何もお前といふ女に未練未釋があつて、こんな臭エ思をしてゐる譯ぢやねへんだから安心しな、手取り早く云つてしまへば、それ、お前のところにゐた、あの米とか友とかいふ變てこな兄いが、どうした間違へか役人にとつゝかまつて、てうさんてへ罪で、草津の辻で三日間の晒らし、それが濟むとやがて鋸引にならうてんだ、どうも、むじつにしてもあんまり桁が違ひ過ぎるやうだから、何とかしてやりてへが、おれは世間の暗い身柄で、どうにもならねへ、だが、あの

滅法無類の正直者が、何かの間違へで、あゝ云ふ事になつて、今日明日のうちに首がコロリといふ仕儀であつて見ると、いかにやくざ野郎でも、あのまゝ見過ごしにや出來ねへよあの男とはお角親方、お前の方がずつと緣が深いと思ふから、どうにかしてやんな——三日の晒らしの後は、鋸引か打首、こゝに間近エ坂本の城ではねへが、今日明日のうちに首がコロリつてへんだ——何とかしてやるがいゝと思つたら、何とかしてやりねへな」
がんりきの、やくざ野郎から、斯う云はれたお角が、また面の色を變へました。
「何だつて、あの友が、米友の野郎が何かい、草津の辻で晒らしにかけられてるつて、さうして今日明日のうちに首がコロリだつて、そりや本當かい」
「嘘を云つて、お前をたぶらかす爲に、こんな臭い思ひはしねへよ」
「馬鹿にしてやがら」
お角さんが、こゝで捲舌を使つたのは、それは、がんりきを罵つたのではない、あの一本調子の氣短かのグロテスク奴が、また何か役人を相手にボン〳〵やり出して、とつゝかま

つたのだらうだが、相變らず手數のかゝる野郎だ、それにしても、三日間晒らしの今日明日のうちに首がコロリはひど過ぎる、友といふ野郎は、本來あゝいふキップだが、惡い事は頼んだつてする野郎ではない、それをどう間違へたか、三日間晒らしの、今日明日のうちに首がコロリとは、役目を預かる奴等にも、あんまり目が無さ過ぎるといふものだ。

そこで、お角が齒噛みをしてお手水場の床を踏み鳴らしました。

一一

がんりきの百の野郎と雖も、一から十までロクでない野郎だといふ限りでもない、それから後暫くあつて、臭い處から這ひ出した此の野郎は、お角親方の特別借切りの一室を一人占めにして、すつかり納まり込み、長火鉢の前で、長煙管でバクリバクリ、さうして煙を輪に吹きながら、ひとり言、

「ふ、ふ、ふ、そうら見ろ、あの女め、火のやうに怒り出しやがつた、だから、云はねへこつちや無へ、あいつを、あゝ嗾しかけて置きあ、火の中へも飛び込むよ、あの勢で押しかけて行つた日にや、やにつこい役人はタヂ〳〵だぜ、何とかするよ、何とかしねへまでも、只ぢやあ首にさせねへよ」

といふのは、つまり、自分の寸法がすつかり圖に當つたことを己惚れてゐる、苟も自分の子分子方であつたものが、今日明日のうちに首がコロリといふ運命に陷つてゐるのを、知らざあ兎も角、それと閑いて、あゝさうかと濟まし込んでゐる女では決してない、自分としては、あんな處へ面も體も出せた身ぢやねへが、あの女ならば、何處までも押して行くよそこを見込んで、かけ込んだおれの寸法が當つた、

がんりきの野郎は、その寸法を己惚れきつてゐる、その一方にはかうして、お角を火の玉のやうにして、轉がし出して置きながら、そのあとを然るべき要領で、お角親方の連衆の一人世にこしらへ、留守番を一人守つてゐる體にして、避難と休息とを兼ねて、ゆつくりと落つくことが出來る、つまり一石二鳥にも三鳥にもなるといふ寸法だ、これから、あの掻卷の中へ、すつぽりとくるまつて、目まぐろしい此の頃の湖畔のやりくりの骨休めをすることだ、

「有難へ、お茶を一べえ——甘えお茶菓子も有らあ」
そこで、お茶を飲み菓子を食ひ、さて、ゆつくり搔卷へもぐり込んで、一休みと足腰をのばしにかゝつて見ると、指が痛む。
「ちえつ、右の腕はブチ落される、今度は殘つた左の方を小指から成し崩しなんぞは酷いこつた——因緣ものだなあ」
と云ひながら、繃帶を外して捲き換えてゐる、長濱の濱屋で落された指一本の創あとがなか〳〵痛い、目まぐろしさにまぎれてゐたが、安心して見ると痛み出す——懷中から藥を取り出して、それをつけ直してゐる、また繃帶を捲き換えて見る。

一二

果して、がんりきの豫想通り、お角さんは火の玉のやうになつて、この宿を轉がり出たのです。
その勢で、本陣へ上がつて、伊太夫に面會したが、もうその時は、さき程心配した自分の

責任感の事などは、いつしかケシ飛んでしまつて、晒らしの罰憤で張りきつてゐました、それでも、つとめて抑制して伊太夫へは叮嚀な挨拶を試みたつもりですけれども、挨拶が濟むと早くも暇乞ひでした、
「ほんとに、大旦那樣、萬事ゆつくりとお話し申上げ、お詫びも申上げなければなりませんのですが、急に、急ぎの用事が出來ましたから、これから、ちよつと一走りかけつけて見て參ります、容子を見屆けた上で、引返してすぐまたお伺ひ致します、ほんとに、旅へ出たからつて、樂は出來ません」
お角さんの餘憤滿々たるのを、伊太夫は只事でないと見て取つたものですから、
「まあ、落つきなさい、何かお前さん、よつぽど張り切つてお出でなさるが、何事が起つたのです」
「いえ、なあに、つまらない事なのですが、家の若い者が……いゝえ、以前家に使つてゐた若い奴が、氣が早いものですから、旅に出て、失敗をやらかしちまいましてな、困つた奴つたらありません」

「どうしたのですかな、旅に出ては間違ひが起り易いから、浮つかり張りきつた氣分のまゝでやると、却つて事こわしになりますよ、何事です」

「いえ、もう埒も無い奴なんでございますが、どう間違へられたか、草津の辻とやらで、晒らしにかゝつて、今日明日のうちに首がコロリ――と聞いて見ると、いゝ氣持は致しません、いゝ氣持どころか、斯うしてゐても立つてもゐられないのが、わたしの性分なんでして」

「まあ、待つて下さい、その晒らし者の事ならわしも見ましたよ」

「まあ、大旦那樣、あなたも御覽になりましたか、あの米友の奴が……」

「名前は何といふか知りませんが、また、あの男がお前さんの、かゝはり合ひの男だといふことも、始めて聞くのですが、どうも通りかかつて、あれを見てわしも變だと思ひましたわい」

「全く變な奴なんでございます、あの友といふ野郎は、變つた野郎には相違ございませんが、てうはんをしたり晒らしにかゝつたりするやうな氣の利いた事の出來る野郎ぢやないのです、あいつは、天性曲つたことの出來ない野郎なんですが、それが間違つて、晒らしにかゝつた上に、今日明日のうちに首がコロリでは、どうあつても、このまゝでは濟まされませんが、斯うしてゐる間も氣が急くんでございます、あの野郎は、どう間違つたつて、てうはんなんぞをする野郎ぢやありません、人違ひにも程があつたものでございます」

お角さんの言葉によるとてうさんがてうはんになつてゐる、てうさんの說明は前に云つた通りですが、てうはんとなると僅か一字の相違で內容も形式も全く別なものになる、卽ちてうはんといふのは「ばくち」の一種で、丁よ半よと輸贏を爭うことの謂ひなのであります、これによると、お角さんといふ人の頭にはてうさんの解釋が成り立つてゐない、一圖にてうはんと受取つてしまつてゐる、卽ち丁よ半よと血眼になつて勝負を爭つた事の爲にお手入れがあつて、それが爲に捕はれてお仕置になつてゐると受取る方がお角さんの頭には通りがよい。

てうはん、ちよぼいちの罪の罪たるべき事はお角さんの頭にもある、たゞ、そのてうはんちよぼいちを弄したといふことの爲に今日明日のうちに首がコロリといふのは處柄かも知

れないが嚴し過ぎる、まして、あの正直一方の米友がてうはん、ちよぼいちなどに引かゝる人物でないといふことは、お角親方が頼まれなくとも保證する處である、それが爲にお角さんの激昂が一層、煽られてゐると見なければなぬ。

一三

お角の激昂するのを聞いてゐた伊太夫は

「成程、さういふ場合ではお前さんの氣象としてぢつとしてゐられないのも無理はない、だが、相手は何と云つてもお上役人だから、たとへ理があつても正面からボン〳〵行くと却つて事こわしになる處がある、相當の筋を辿つて何か穏やかな助命方法はないものかね」

さう云はれると、お角さんも馬鹿でないから、昂奮のうちにも、敵を知り己を知るの分別が出て來ない筈はない、お上だらうが何だらうが、理に二重はないといふ勢で、押かけて見たところで、相手にされなかつたらどうする、それを強く押して見たところでどうなるよしそれはどうならうとも、當つて碎けろ！　此處で後へ引くやうなお角さんとはお角さんが違ふと云つてしまへば、それまでだが、お角さんの米友と違う點は其處にある、伊太夫は言葉をつゞけて云ひました。

「勉じてお上役人といふのに、ぶつゝかるには更に、も一段上から出るか、側面から當るのが最も効目のあるものだ、役人といふものは上役に對しては、頭の上らないものだから、天降りである以上は否も應もない、さうでなければ搦手から運動することだ、そこから穏やかに話をつけると存外物わかりのよい事がある、名役人といふものは上も下もありはしない、理が聞えれば、誰の言葉も聞いてやるが、なか〳〵その名役人といふものはないものでな――だから、天降りとか搦手とかいふやつが、いつの世でも相當効目があるものなのだどうだい、お角さん、そんな意味で何か上の方からかう運動するやうな手筋は無いかね、わしも一應は、心當りをこれから思案しやうと思つてゐるが、何を云うにも旅の身でねえ」

伊太夫から、さう云はれて、お角としても、いよ〳〵成程と思はせられない譯には行かないで、

「御尤もでございますね……」

と云つて見たが、その外には急に何等の思案も浮ばないから、二の句も次げない、成程、此の大旦那が甲州一圓の土地であるならば隨分面も利き壓もお利きなさらうけれど、この大旦那でさへ旅の身ではねえと啣言をおつしやる――まして女興行師風情のわたしで、どうなるものか、それを考へ合すと、腐つて――まはざるを得ない。

お角さんが、やきもきしながら返答が出來ないでゐる、その心持を伊太夫は充分察することが出來るから、お角さんから強いて返答を催促するのでなく、自分の事として自問自答を試みて、

「一體、この土地は、どこの藩に屬してゐるのかな、水口藩か膳所藩か――さうだとすればこゝの標者は何の誰といふ人か、その人に向つての手蔓――たゞし、彦根の藩中には相當の重役に知り合がある、さうだ、あれから渡りをつけてやらうか、彦根ならば他の小藩への通りが宜からう、だが、もし、何れの藩にも屬してゐない天領だとなると、幕府直轄のお代官だとなると、事が少々面倒だぜ、御老中差廻しのお代官に悪く出わした日には大藩でも扱ひきれない事がある――さあ、その邊を一つ考へて見ない事には」

伊太夫は、自問自答式に斯うつぶやいて、漸く思案が深入して行く途端に、お角さんが、急に、膝を上げて云ひました。

「あゝ、いゝ事がございました、ほんとに、どうしてこれに氣がつかなかつたんでせう、わたしといふ女も、實に頭の悪い女でござんしたよ」

「何か、いゝ分別がつきましたか」

「大旦那樣、誰彼とおつしやるよりは、新撰組が宜うござんせう新撰組をお頼り申すのが、手つとり早くて、一番利目がありさうでござんす」

「なに新撰組――」

「左樣でございます、とつくに其處へ氣がつかなければならないわたしといふ女の頭が、こんなにまで悪い頭とは思ひませんでした、旅の風に吹かれ通した爲に腦味噌が少し參つたんでせうと思ひます」

お角は獨り呑み込んで頻りに意氣込んでゐる。

それから、お角が伊太夫に向つて、今、京都から此の地方にまで及ぼす處の、新撰組、卽ち壬生浪人といふものゝ威力の、如何に強大であるかといふ事の、たつた今仕込み立てホヤ〳〵の智識を述べ立てました。

新撰組の行動に就ては、御領主樣と雖も、お奉行樣と雖も、之に加うることは出來ない、當時、名立たゝる大藩と雖も、會津と雖も、彦根と雖も、之には一目も二目も置く、新撰組に脫まれた以上は、公儀役人と雖も、到底その私刑を免るゝことは出來ない、さしも横議横行を逞しうする大藩の、勤王浪士と雖も新撰組だけは苦手である、大菩薩峠前册の五七六頁前後のところにその威力の程が見えてゐる、その新撰組の威力を借りる時は、たとへ相手が大藩領であらうとも、天領であらうとも、斷じて押しの利かない事はないといふことの信用をお角が今、やきもきと思ひ起して伊太夫に吹聽しました。

而して、その新撰組を意のまゝに驅使するところの大將が近藤勇で、副將が土方歲三である、その副將軍土方歲三とわたしは心安い、つい、今の先きも昔の歲どんで附合つて來

た、その力を借りて、押しきつて行けば、何のてうはんの一人や二人、事も雜作もあるものではない、と、お角さんが、張りきつて此の事を伊太夫に申出ると、伊太夫も、此の際一應はそれを承認しました。

といふのは、當時、新撰組の及ぼす威力は京洛の天地だけではない、その時代の動靜が可なり敏感に傳へられる處の甲州第一の富豪の手許まで情報が屆いてゐないといふ事は無いどこまで彼等に全幅の信用を置いていゝか惡いかわからないが、此の際は、事の思案よりは、急速の實行を可なりとする、時にとつての强力が必要である、そこで、伊太夫も一應お角の提議を承認するまでもなく、お角さんは早くも庄公を次の間まで呼びせて

「庄公――お前これから大急ぎ、馬でも駕籠でも糸目はつけないで、一走り使に行つて來ておくれ――ほらあの、新撰組の土方といふ先生――いゝかい、これから山王樣までまた駈けつけて貰ふんだよ、あそこへ行つて歲どんに、わたしが是非加勢に賴みたいことがあるつて、言傳をしてお呉れ、譯を云つては長いから、お角親方が大難に出逢つてゐる草津の北の辻で、お角親方が晒らしにかけられるといふ段どりになつて九死一生なんだから

歳どんに加勢に來てもらひたい、と斯ういつて賴んでごらん、もし歳どんがゐなかつたら、あのやさ男で小天狗と云はれた沖田總司といふ先生でもいゝし、永倉新八といふ先生でもいゝから、大急ぎで加勢に來てもらひたいと云つてね――歳どんも、沖田さんも永倉さんもゐなければ誰でもいゝ、新撰組と名のついたお人ならば誰でもいゝから、賴んで來てお呉れ、事によると何處ぞへ引き上げておゐでなさるかも知れない、今時、新撰組と云へば泣く兒もだまるんださうだから、何處にゐたつて居所は知れさうなものだ、大急ぎ、九死一生の場合、今日明日のうちに首がコロリてんだから、そのつもりでお前、しつかりやつてお呉れ」

かう云ひつけて置いて、お角自身も急に伊太夫に向ひ、

「大旦那樣、では、わたしの方もこれから現場へ駈けつけて見ますから――時が遲れてはいけません、救ひの手が來るまで、どつち道、現場へ因緣をつけて置いて見ることに致します」

斯くてお角さんは、ゆらりと立ち上りました。

一つは新撰組へ救ひの手を求むべく、一つは自身、グロテスクの晒らしの現場へ出頭して、水の手の來るまで因緣をつけて置かうとの策戰らしい。

一五

お角が立つたあとで伊太夫は考へてゐる。お角を助ける爲に來たのではないが、かうなつて見ると、彼女の爲に相當の力添えをしてやらなければならぬ事態になつてゐる。

但し、自分の力の及ぶ範圍ならば知らず、旅へ出ての身である、まして今度の旅は人も我も思ひがけない旅である。人に知られたくない旅の身である。彦根の家中の重役には相當知邊はあるけれども、事改めて、そこへ持ち込みたくない。

だが、何とかして、側面から、お角が急を訴へてゐる寃罪の者の助命をしてやらなければならぬ。新撰組なるものゝ威力が果して間に合ふだらうか、何れにしても焦眉の急である――取り敢へず、此の宿の亭主から、たづねてきつかけを求めねばなるまい。

「どうもあの女親方が、あゝ、張り切るのはよく〳〵の事だらう――何とかしてやらずば

なるまい、お前、取り敢えず支配地の籍を調べて、役人の筋を辿つて、一つ穏やかな助命運動が出來るものなら至急その道を講じてもらひたい」

家來の藤左に向つて、伊太夫がこの事を申しつけると、藤左は心得て、宿元からして、急速に調べ上げた情報が次の如くです。

この地に長谷久兵衛といふ鬼代官がゐる、名代の農民いじめで、年貢不納のものは遠慮無く水牢に入れる、嚴寒の節に水の中に立たせる、泣き叫ぶ聲が通路まで聞えて、人の身の毛をよ立てる、女房娘は遠慮なく身賣りをさせたり、自分が沒收したりする、たまり兼ねて瀬田の橋から身投げをしてゐてる男女が續々と相つぐ。

草津の辻の晒らし者も、江戸老中差廻しの役人がさせるのか、この土地の役人がしたのか、それはよくわからないが、ともかく、此の久兵衛が悪い、久兵衛のさし金でなければその獻策に相違ない、何でもかんでもその長谷久兵衛が鬼代官だといふ情報が、どちら方面からも、期せずして、伊太夫の手許へ集つて來る。

して見ると、長谷久兵衛なるものは惡辣であるだけに權者である、何にしても、こいつを押へてかゝるのが有利だと伊太夫が覺りました。

押へてかゝると云つたところで、力を以て押へてかゝるわけには行かない、手段方法を以て、この代官から理解してかゝらぬことには事は運ぶまい、その代り、この代官の理解さへ屆けば。必ずや相當の緩和方法があるに相違ないといふことに伊太夫が合點して、取り敢へず、家來にその運動方法を命じたのです。

運動方法といつたところで、今の場合、さし當り特別の手段方法があるべき筈は無い、伊太夫の持てるものとしての力はその財力です、微行で旅に出たとは云へ、甲州一國を押へてゐる力は何かにつけて物を言ふ、金力が時處を超域して權力以上に物を云ふ場合が大に有る、伊太夫の取り得べき手段方法としては、その有り餘る金力を有効に行使して見る側面運動の外には無いでせう。

併し、いきなり小判で鼻つばしを引こするやうな賄似は出來ない、手蔓の無い、しかも焦眉の急に應ずる爲の財力の發動としては、その方法に相當微細にして巧妙なるものが無ければ却つて事を仕損ずる。

伊太夫は、それを藤左に向つて考へさせてゐる。

一六

草津の辻のグロテスクな晒らし者は多くの方面にいろ〳〵の衝動を捲き起したが、意外千萬なことにはその翌朝になると、「てうさん」の罪人として晒らされた宇治山田の米友の姿は、晒らし場から跡を消して、そのあとへ別に一つの「梟首」が行はれました。首が晒らされてゐるのです、つまり、生きた人間を縛つて曝らす代りに、人間の首を切つて、さうしてそれを梟らしにかけました。

さては――と人集りの中に、血相を變へたものもありました、と、そのうちには、あの無言のグロテスクも、とう〳〵首になつたか、兎も角も生きて晒されてゐる間はまあいゝとして、首を斬られて「梟首」に行はれるやうでは、もういけない。

あれほど、いきり立つたお角さんはどうした。

其の處に、當に右の如く人間の「梟首」が行はれてゐることは、事實に相違ないが、よく〳〵見直した時、いづれも失笑しないものはありません、

「あつ！なあーんだ」

人間の首が曝らされてゐるには相違ないけれども、その首といふものが甚だ無難なる首でありました。

木像なのです。木像の首なのです、しかもその木像の首たるや、ほゞ普通人間の三倍ほどある分量を持つてゐて、木質だけはまだ生々しいのに、昨今急仕立の仕上げと見えて、その彫刻ぶりが、荒削りで、素人業が企まずして七分は滑稽の味を漂はせてゐる。

併乍ら、兎に角、人間の形をした首は首です、その首が、昨日までは米友が全身を以て生きながら晒らされて居つた處に、置き換えられてゐる、しかも、その首をなほよく〳〵見るとまた見覺えがある――誰でも相當見覺えがある、東穆こそしてゐないけれども、冠をかぶつてゐる、その冠りも天神様や荒神様のふぶるやうな冠ではなく、世に「唐冠」として知られてゐる、中央に直立した一葉があつて、兩翼が左と右に開いてゐる、古來此の冠をかぶつた畫像木像に於て最も有名なのは「豐臣秀吉」である、殊に此の附近は、秀吉の

第二の故郷として、その功名の發祥地と云ひつべきですから、この「唐冠」の太閤樣は、ほゞ、兒童走卒までの常識となつてゐる。

「やあ、太閤樣が晒らし首になつてゐる」

人も騷げば、我も騷ぐ、

「太閤樣の晒らし首」

子供達は、嬉しがつて騷ぐが、苦笑せぬ大人とては無い。

何者がした惡戲か。いたづらが過ぎる、まさに知善院藏する處の天下一品と稱せらるゝ豐臣太閤木像の首を模して、斯樣な素人細工を急造し、さうして、昨日までの生きた現物と引き換えて此處へ晒らしたものに相違ない、農奴と張り出された宇治山田の米友にとつて見れば、今度はかりにも豐太閤の面影と引替へになつたといふことになつて見ると、聊か光榮とするに足るといふべきだが、太閤の影像にとつては迷惑この上もあるまい。

何の理由があつて、何者が斯ういふ、摺り替へを行つたかといふ事はわからない、無論、有司の仕業ではなく何者かの最も惡趣味なるいたづらであることはよくわかる、この時代に於ては、かういふたちのいたづらが、よく流行したもので、その最も代表的なるものは京都の等持院の足利家累代の木像を取り出して四條磧にさらした事である。

而して、この場合に行はれたのは、足利家とは何等ゆかりの無い、豐臣太閤が、同樣の私刑に行はれたといふ現象であつて、一見して誰もが、相當に度膽を拔かれたが、その傍の捨札までが、いつしか書き替へられてあるといふことは、文字ある人だけが氣のついた事であつた。新らたなる捨札の文言に曰く、

「コノ者、農奴ヨリ出世ノ身ニカ、ハラズ、農民搾取ノ本尊元兇タル段、不埒ニツキ梟首申ックルモノ也」

この意味がわかる者もあるし、わからないものもある。いづれも度膽を拔かれた體に於ては同じものです。

一七

琵琶湖畔に、農民暴動の空氣が充ち滿ちてゐる——

といふことは、前冊書に、しば〳〵記したところであるが、その要領としては、第十三冊「新月の巻」の第四十九回三百二十頁のところに、不破の關守氏が、お雪ちやんに向つて語つたところに、

「まあ、お聞きなさい、お雪ちやん、かういふわけなんです、事の起りと、それから、騒動の及ぼす影響は……」と前置きをして

「今度の檢地は江戸の御老中から差廻しの勘定役の出張といふことですから、大がかりなものなんです、京都の町奉行からお達しがあつて、すべての村に於て、この際、如何やうなお願ひの筋があらうとも聞き届けることは罷り成らぬ——村々からあらかじめ、そのお請書を出させて置いての勘定役御出張なのです。そこで老中派遣の勘定役が兩代官を從へて出張して參りましてな、郡村に亘つて、檢地丈量の尺を入れたのでござるが、もとよりお上のなさることだから、人民共に於て彼是のあらう筈は無いのでござるが、そのお上のなさるといふのが必ずしも一から十まで公平無私とのみは申されませんでな」

「つまる處わいろなんですね、當節は到る處、それなんだからいけませんなあ、わいろでもつて、すつかり手心が變るんですからいけません、一體、役人がわいろを取つて公平を失するといふことほど政治上いけないことはありませんね……今度の騒ぎもそも〳〵そのお江戸の御老中派遣の勘定方が、わいろによつて檢地に甚だしい手心を試みたそれが勃發のもとなんで……」

江戸老中派遣の、わいろを取る役人が出張して思ふ存分に竿を入れる、その位だから寛嚴の手心が甚だしく、彦根、尾張、仙臺等の雄藩の領地は避けて竿を入れず、小藩の領地になるといふと、見くびつて烈しい竿入れをしたものだから、領民が恨むこと恨むこと、そこで、これはたまらぬと、庄屋達が寄り集つて、竿入れ中止の運動を試みやうとしたが、そこはわいろ役人に拔け目が無く、豫め一切の訴願罷りならぬといふ覺書を取つてある、併し、領民達になつて見ると、死活の瀬戸際だから默つてゐられない、その鬱憤が積りつもつて大雨で水嵩が増して行くやうに緩漫に似て漸く強大である、何處の村から、どう起つたかといふことは今わからないけれども、近江の四周の山水が湖水へ向つて集るやうに湖岸一帶の人民の不平がある地點へ向つて流れ落ちて溢れて來る。

たとへば野洲郡と甲賀郡の歎願組が合流して水口へ廻らうとすると、栗田郡の庄屋が戸田村へ出揃つて來る、勘定役人が甲の川沿から乙の川沿に行かうとすると、兩の郡の農民が結束して集るもの數千人、殊に甲賀郡西部方面から押出した農民は水口藩警固の間を外れて權田河原に屯ろし、同勢見る〳〵加つて、一萬以上に達し、破竹の勢で東海道を西上し石部の驛に達したが、膳所藩の警固陣を突破し、上郡に殺到、そこで他の諸郡の勢と合し無慮二萬人に及んで、三上藩に押寄せるといふ勢力になつた。

幕府の勘定方の役人は、その時、三上藩にゐたが、藩の役人が怖れて急ぎ避難をなさるやうにと勸めたが、剛情我慢な幕府勘定役人はそれを聞き入れない、遂に群集は陣屋へ殺到して、勘定方役向を取り圍んで口々に歎願を叫んでゐる、幕府勘定方役人の生命も刻々危急に瀕してゐる——

一八

なほ、その事のあつた前後、寄嵐居士が又しても、伊吹の山莊に不破の關守氏を訪れての會話が漸く興に乘ると、次のやうな事を滔々と論じ立てました。

「そも〳〵德川氏ばかりが、農民の敵だと云ひふらすやからは二を知つて一を知らないものですよ——例の豐臣氏なんぞが寧ろ農民を絞る方の本家と云つて然るべきでせう、たとへばです」

「日本に於て、農民が最も幸福であつた時代は鎌倉時代、取りわけ北條時代であつたのですが……さて、應仁の亂以後、天下を平定した豐臣秀吉といふものが、御承知の通り彼は全く名もなき農民の出でありましてな、そんなら、その純粹の農民の出であるところの豐臣太閤といふものが、どういふ扱ひをその親元の農民に向つて試みたかと申しますと、先づあの時のあの人が行つた「檢地」といふものでよくわかりますな、秀吉の時までは一段歩は三百六十坪であり、一坪は六尺五寸平方であつたのですが、それから一段三百坪に改め、一坪を六尺三寸平方とし、これによつて約二割以上の增收を農民の上に加へたのであります」

「秀吉もその武力統一を完全にすると共に、大陸政策を實行する上に、どうしても農民を

搾らなければならなかつたのですな、農民を搾る爲には、農民を無力にして置かなければならなかつたのですな、そこで「檢地」の一方には「刀狩」といふやうな事も行はれましたのです、農民から一切の武器を取り上げて、苟も反抗の出來ぬやうに丸腰にしてしまつたのが秀吉です」

「それを德川氏に至つて、更に徹底的に强行政策を用ひて壓迫しきつたといふのですな、だから、德川氏の政策は農民を人間扱ひにはして居りません、濡手拭と百姓は、絞れば絞る程水が出る——　最後の一滴まで絞るやうに慣らしてしまつたのですな、德川氏の對農民政策はその通りですが、その桶を作つて與へたものは豐臣秀吉なのです、殊に德川氏は少なくとも城主大名の家に生れたのですが、豐臣に至つては、尾張の中村の純粹なる農民の出であるにかゝはらず、農民の地位を向上せしめず、之を奴隷以下に置くことの桶を作りました、もし、農民が目下の檢地の殘忍刻薄を恨むならば、當然、同じく德川家康を恨まなければならない、家康を恨む以上は、秀吉も亦同罪のみかは同罪以上の元兇であることを恨まなければならない理窟になるのです」

宵嵐居士は、自分が、斯ういふ意見の所有者ではない、廣く歴史を讀んでゐる間に、かういふ史上の事實を摑み出でゝ語るものらしい、すると不破の關守氏も、その說には相當共鳴する處あるものの如く、

「秀吉は農奴から起つて、關白に成つたといふことは爭うべからざる素性と考へますが、家康とても必ずしも、生え抜きの城主大名とは云はれますまい、近頃、窺かに研究した人の說によると、彼は農民よりも尙賤しい、乞食の徒、願人坊主さゝら賣りの成上りだといふ事であります」

「はゝあ、それは新說です、德川家康の幼名竹千代、岡崎の城主松平廣忠の公達といふのでなく、願人坊主さゝら賣りの成上り……それは果して根據のある說ですか」

「當人の研究によると、なか〳〵根據があります、つまり、その說は……」

一九

不破の關守氏は、村岡融軒著「史疑」と稱する一書を取つて、宵嵐居士の前に置いて云ひ

つゞけました。

「この書物は、相當丹念に研究して成つたもので、面白い說ですから拙者は、要領をうつし留めて置きました、お暇の時に御一覽下さい、而して要するに、德川家康の眞實の素性を突き留めんとした書物でありまして、結局この著者の研究の結果は、家康は籔者の子であつて松平氏の若君でも何でも無い、十九歲までは乞食同樣の顚人坊主であつた、それが正銘の松平の曹司竹千代が駿府に人質となつてゐるのを盜み出し、それを信長に賣り込んで出世の緖を開いたのだといふ說です――」

「はゝあ、さういふ新說は今まで聞きませんでした、それだけの說を立てるからには、必ずしも據る處が無いわけでもありますまい、荒唐無稽の小說ならば兎に角、新研究とあるならば、一應讀んで置く必要があると思ひます、拜借致しませう」

「どうぞ、御ゆつくり御覽下さい――處で、秀吉も家康も右の通り、その出生が農奴であり非人同然であるに拘はらず、成功した曉には、その發祥民族を酷使虐待する、成程、その俑を作つたのは秀吉でありませう、それに輪をかけ、箍をはめたのは德川氏です」

「左樣、德川氏の農民政策に就ては、拙者も心がけて少々研究を試みてゐないでもありませんが……」

と云つて、そこで、今度は、またも德川氏の農民政策問題に復歸して、各々、その懷抱を傾けて語り合ひましたが、落つる處は、神尾主膳が百姓を憎むところの根據の裏を行つてゐるやうなもので、德川家直參の旗本であることを誇りとする神尾主膳が、極力農民を侮辱してゐる、それは、やはりこの大菩薩峠の第十四册「恐山の卷」の第三百四十五頁のところから見るとよくわかる。

『神尾は生れながら、百姓といふものは人間ではない――ものゝ如く感じてゐる。それは當然、階級制度の敎へるところの優越性も原因であることには相違ないが、それほど神尾といふものが、百姓を忌み嫌ひ惡み呪ふといふのは、別にまた一つの歷史もあるのです。

それは、神尾の先祖が百姓を搾らうとして却つて百姓からウンと苦められ、いぢめられてゐる、神尾の祖先のうちの一人が、自分の放蕩濫費の尻を知行所の百姓にすつかり拭は

せやうとした爲に、百姓一揆を起されて家を危うくした事がある。

體面の上からは勝つたが、事實に於ては負けた、領主としての面目は辛うじて立つたが內實は百姓の言分が通つてしまつたのだ。

だから、心ある人は。それから神尾の家風を卑しむやうになつてゐる。

その歷史が、今も神尾を憤らせてゐる、百姓といふ奴は嚴しくすれば反抗する、甘くすればつけ上る——表面は土下座をしながら、內心ではこつちを侮つてゐる、最も卑しむべき動物は百姓だ——これには强壓を加へるより外に道はないと　それ以來の神尾家は代々さう心得て百姓を抑へて來てゐた。今の神尾主膳も百姓を見ると胸を惡くすること、この歷史から來てゐる。

……　……　……　……

この點に於て、神尾主膳は德川家康の農民政策を支持してゐる。

「權現樣の收納の致し樣」と云つて、百姓は生かしもせず殺しもせざるやうにして搾れといふことが　卽ち德川家康の農民政策であつたと今日まで傳へられてゐるのだ。

毎年の秋、幕府直轄の「天領」を支配する代官がその任地に歸らうとする時、家康は面前へ呼びつけて、

「鄕村の百姓共をば、死なぬやうに、生きぬやうにと合點いたし收納申付くべし」

と申しつけたといふことである。

その傳統を承つてこれは家康の落胤だと言はれた土井大炊頭の如きは、ある年その居城下總の古河へ歸つた時、前年までは見る影も無かつた農民の家が、今は目に立つやうになつて來たとあつて

「百姓、生き過ぎはしないか」

と部下の役人へ詰問的の問ひをかけたといふことになつてゐる。

その當時の名主の家には必ず水牢木馬の類が備へてあつたのだ、百姓共が年貢を滯納する時は、水牢へ入れ木馬に乘せて之を苦しめたものだ。

それだけを聞いてゐると、如何にも、農民に對して血も淚もないやり方のやうに聞こえる、德川家は農民を見ること牛馬以下であつて、農民にとつて德川家は仇敵でゞもあるか

のやうに聞えるが――事實、天下の政治をするものに好んで農民を苦しめたがる奴があるのか、苦しめるには苦しめるだけの理由があるのだ、苦しめられる方は苦しめられるだけの因緣があるからなのだ。

一體、發祥時代の德川家の地位を考へて見るがいゝ、天下は麻の如く亂れて、四隣皆强敵だ

その間から千辛萬苦して天下を平らかにする――勢ひ兵馬を强からしめねばならない、兵馬を强からしめるには後顧の憂ひを斷たなければならない、兵馬を强からしめるには、兵馬を練ればよろしいが、後顧の憂ひ無からしむる爲には百姓を柔順にして置かなければならぬ　百姓は矢玉の間に命がけで立働らくには及ばない代り、柔順に物を生産して軍隊の兵砲を補充しなければならない、萬一、百姓を强くして之に反抗の氣を畜へしめた曉には、强い戰爭が出來る筈は無い、そこで百姓を骨拔きにして置かなければ、軍隊を强くして天下を平定することは出來ないのだ。

だによつて、家康が百姓を抑へたのは、武力を伸ばさん爲、武力を伸ばすのは天下を平定せんが爲なのだ、さうして家康はそれに成功したのだ、百姓をいぢめたいから、自分が

榮華を極めたいから、そこで百姓を虐待したわけではないのだ。

現在、百姓共が、安穩に百姓をして居られるのも、この德川の武力があればこそではないか、强い武力が無ければ、國は取られ田は荒され、百姓は稼ぐところを失ふどころか、稼ぐべき田地をさへ持つことは出來ない。

だから、百姓は百姓として、分を守つて服從してゐさへすればいゝのに、やゝもすれば反抗したがる、表面服從して少し目を放せば一揆を起したがるのが百姓だ――殊に近來は一揆の無賴漢の雪頭を取るものを稱して「義民」などゝ祭り上げる輩が多いから、百姓がいよ〳〵增長する――云々。

二〇

「何處の國の百姓も、百姓としては皆うだつの上らないのは同じだが、殊に此の近江の國の百姓はみじめなものです」

と青嵐居士が不破の關守氏に向つて云ふと

「どうしてですか」」

「それは、京都を、つい背後に控えてゐるだけに、戰爭といふと、この國が唯一の要路となるのです。東國の兵がこの國を通過せずして京都に入ることは出來ません、西國の兵もこゝを通過せずして東征は出來ません、そこで、亂世に於ては國土が絶えず兵馬に蹂躙せられ、人民が殘暴を蒙りますから、土地に安堵して生活を營むといふことが出來ません、いつ剽掠を蒙るか掠奪せられるかわからないのみならず、人力も絶えず徵發せられて爭鬪の犧牲とならなければならない、生民その堵に安んぜずといふのが、此の近江の國の住民の運命でした」

「成程」

「併し、人間といふものは運命に妨げられると共に、運命に逆らつて新境地を打開する力を與へられて居るやうでありまして、斯く不幸なる境地に置かれて、堵に安んぜざる變通力が、一轉して商業の方へ注がれたといふわけです、故にこの國の勤勉にして機を見るに敏なる土民共は、農業を捨てゝ商業の方に着目し、轉向することになりましたのです」

「成程」

「土着の土地を相手にしないで、他領他國を目的とする、自分の生れた土地を生産してそれから惠まれることを斷念して、他國へ進出して富を吸收して來るといふ新方向を案出したのも自然の徑路とはいへ、この國の住民が馬鹿でない證據です」

「成程」

「そこで、近江商人の名が天下に聞えるに至りました。勤勉實直にして知らぬ他國から金を儲けて產を成し、その產を蓄積することに於て、また非凡なる忍耐と進取との才能を持つて居りました、他國に向つての積極的進出と自ら守ることの堅實な消極的忍耐と兩方をこの國の人間が持つことが出來たといふ次第で——そこで自分の國の亂れるといふことが商人として成功する逆緣となりました、今日、大阪に於ける、江戸に於ける近江商人といふものゝ財力の、いかに根强くして盛んなるかを、思ひ合せてごらんなさるとよくわかります」

「成程、さうおつしやられると、それが所謂近江商人の勢力の一大原因であるかのやうに

感ぜられます、國土が爭亂の巷となるが故に、住民が他國へ進出する機緣となる、逆緣が却つて利緣となつたといふ次第ですな」

「さうです、併し、そんならば、すべて自分の國が亂れてゐるところの人民は、外に向つて大に發展をするかと申すと、それは一概には云はれません、全く疲弊しきつて奴隷以下に沒落してしまふ國民もあるのですから、要するに氣質の問題ですな」

「成程」

「江州人は、素質的に逆境を打開する勤勉の氣風を備へてゐると見なければならない理由もあるのです、たとへばです、これから越前の方へ向けて出る途中に難澁な峠が三ッもある、大ていの人だと、それを開いてうんざりし、せめて三ッの峠が二つにでもなればいゝと斯う云つて歎息するところを、江州人は、峠が更に二つばかり餘分にあればよい、さうすれば、人がいよ〳〵難澁がつて出かけない、そこを自分は出かけて行つて、商賣をひとり占めにしてしまふ——大體、かう云つた氣風なのですから、そこに近江商人の勝利があらうといふものです」

「成程——大よその人は地の利を恃むのだが、江州人は地の不利に惠まれるといふわけですな、もとより、それは素質とも相關係しませう」

「勿論、天の時、地の利といひますが、江州人には、天の不祥時と、地の不利益の場合に惠まれるのです、彼等は己れの國土を對象としないで、他國進出を目標としてゐます、そこに彼等の發展があります、併し、かういふ惠まれずして惠まれたる土地の半面には、惠まれたやうで、實は惠まれない不幸の民が多いことを思はなければなりません、近江商人が最も惠まれた成功者だとすれば、近江農民は最も惠まれざる落伍者だといふことも出來ます——」

「成程」

「江州人だとて、皆が皆、さう他國へ進出して成功する者ばかりではありません、この國に殘つて兵馬の奴隷となり、或ひは搜畑の番人とならなければならぬ運命に置かれた農民こそ最も惠まれざる者といふべきでせう」

「斯く、一方には他領他國へ進出して富を成す成功者があると共に、一方にはてうさんすることさへ許されざる農民が存することは、お互よく考へて見なければならないことです」

「成程」

「外へ發展するの機運に惠まれず、内にとゞまつてゐては搾られて骨も身も食はれてしまう、そこで、やむを得ず、他領へ出奔せんとすれば、てうさん律があつて、嚴として身動が許されない、下手な謂釋師のやる荒柳美談ではないが、イむな立つな歩むな居坐るなといふところが卽ち農民の立場なのです」

「成程、さうなりますと、いよ〳〵古への諺にあるが如く民に倒懸の苦ありといふことになりますな、農民は倒さにブラ下つてゐるより仕方がないといふわけですな」

「何にしても、てうさん律はよくありませんな、行動の自由、移住の自由を奪うといふことはよくありませんな、民に移住されると領土を耕す人が無くなる、自然領主がやりきれ

なくなる、といふ結果が怖い、移住されることがそれほど苦しければ、民を優遇するに越したことは無いではないか、優遇といふのが爲し難ければ、人間が住めるだけのやうにしてやる責任が領主にはあるでせう、罪人ならざるものを、一定の土地に監禁して、動く勿れと命ずるのは、悲慘ですね」

「有ゆる農民いぢめのうちに、此のてうさん律が最も不合理だと思ひます、最近です、湖岸の町々村々にもこのてうさん律の制札が出ましたのを御覽になりましたか」

「私も、ちよつと見かけました」

「あの文言をお讀みになりましたか」

「一讀致しました」

こゝで、二人の問答にかゝつて、見たか讀んだかの問題に上つてゐるてうさん律の制札なるものは、多分、先日の日、長濱の町の會所の附近に於て、宇治山田の米友の目に觸れたあれであります。

それならば第十二册「贈吹の卷」の四二七頁のところにある、

長濱の會所へ兩替の使に用心棒としてついて來た宇治山田の米友は、會所の前に暫らく待つてゐたが――そこに高札場があつて、幾つもの札のかけてあるのを見つけました、暇に任せてその高札を片つ端から讀んで見ますと、その眞中の一番大きいのに次の如く書いてありました。

定

何事によらず、よろしからざることに、百姓大勢申合せ候を、とゝうととなへ、とゝうして、しゐて顧ひ事企るをごうそといひ、あるひは、申合、村方立退候を、てうさんと申、他村にかぎらず、早々其の役所に申出づべし、御褒美として

とゝうの訴人　銀百枚
ごうその訴人　同　斷
てうさんの訴人　同　斷

右之通下され、其品により帶刀、苗字も御免あるべき間、たとひ一旦同類になるとも發言いたし候ものゝ名前、申出るにおゐては、其科をゆるされ、御褒美下さるべし

一、右類訴いたすものなく、村々に騷立候節、村内のものを差押へとゝうにくはゝらせず一人もさしいださざる村方これあれば、村役人にても、百姓にても、更にとりしづめ候ものは、御ほうび下され、帶刀苗字御免、さしつゞきしづめ候ものどもこれあらば、それ〴〵御褒美下しおかるべきもの也。

年　月　日　　奉　行

それを讀んでしまつた米友が、高札の表を横目に睨んで、

「はゝあ、一昧とゝうをしちやいけねえてんだな、申合せをして村方を立ち退くのもよくねえてんだな、それを訴人しろてえんだな、訴人した奴には銀百枚を御褒美として下しおかれやうてえんだな、なほ、その上に次第によつちや苗字帶刀も御免あらうてえんだな……一昧とゝうして亂暴を働らくのが惡いのはわかり切つてるが――苦しくつて堪らねへから村を逃散して、何處かへ落ちのびて行くのも罪になるんだ、ゐてもわるし、動いても惡し、立つて退けばまた惡い、百姓といふ奴は立つ瀬が無え」

と云つて、彼は浩歎したのであつたが、思ひきや、そこで、その惡謔なる罪名を自分が蒙

つて、てうさんの罪を着せられて、「晒らし」にかゝる運命に落されてゐやうとは。

二　二

長濱の濱屋の別館に割據してゐるお銀樣と龍之助とが、襖越しに深夜の會話。お銀樣が先づ云ふ。

「だが、可笑しいほど芝居氣たつぷりの男でしたわね」

「うむ」

「いやに氣取つて、セリフ廻しから仕ぐさまで、すつかり芝居になつてゐましたよ、キザもあそこまで行くと、ちよつと笑へない」

「あゝいふ奴なのだ」

「あなた、以前から御存知なんですか」

「ちつとばかり知つてるよ」

「さうすると、あなたの事も、わたしのことも知り拔いてゐての惡戲なんでせうか、それにしては仕上げが拙うござんしたわ」

「は、は、何に限らず、あれはちよつかいを出して見たがるやうに出來てる男なんだ」

「その、ちよつかいが怪我のもとでしたねえ、殺生なことでした」

「うむ」

「殺生は殺生ですけれども、あなたとしては、あんまり、しみつたれな殺生でしたね、どうして二つに斬つておしまひなさらなかつたのですか」

「ふーん、そりや座數を汚してもいけないからな、少し考へたよ」

「かまひませんよ、疊なんぞは、いくらでも新らしくなりますから、ですけれど、指一本といふところが、却つて細工が細かくて面白いのかも知れません。それにあいつは氣のせいか、右の腕が無いやうでしたね、あゝ、わかりましたわかりました、あいつの片腕を打ち落したのが卽ち、あなたなんでせう——女の事で」

と、お銀樣がこゝで、ひとり合點をすると、四方の空氣がいとゞ收斂性を加へて來て、夜更けに近いのか夜明けが迫つてゐるのか、ちよつとわからない氣分が漂ひました。

「がんりきの百藏といふ奴があれなんでせう」
と、やゝあつてお銀樣が、机の上に片肱を置いて云ひましたが、龍之助の方では、とんと返事がない、お銀樣は別段それを追究するでもなく
「それはさうと、あいつの今の言葉で、わたしの父親がこの近いところに來てゐるといふ事をお聞きになりましたか」
「聞いた」
「さうして、わたしの父親から、その脇差を貰つて來たかと云つて、それを仔細らしく、わたしの處へ押賣に來たと云つて居りましたねえ」
「その通り――」
「さあ、それが本當だとすると、わたしは、どの道父に會はなければならないでせう、父は、わたしが伊吹にゐると知つて來たのに相違ありません、上方見物はかこつけで、實はわたしの行動を見屆けに來たのです」
「それは、さうかも知れない」

「して見れば、わたしは結局、會はなければならないことになるでせう、わたしは父の宿を大津まで訪ねて行く氣にはなれないが、父が伊吹へやつて來た以上は、まさか、それを追ひ返すわけには行かないでせう、會はないといふのも卑怯ですからね」
左樣、父の伊太夫が甲州から旅立をしてこの近いところ、大津に宿つてゐるといふことを、先刻侵入のあの小ざかしい生意氣な色男がかつた小盜人の、今いふがんりきの百とやらから、キザなセリフ廻しで聞かされた。現にまぎれもなき、父が愛用の腰の物を證據に持參したのだから、まんざらの出鱈目でないのは分り切つてゐる、そこで、次の段取りは如何にして此の父に應接すべきかでなければならぬ、お銀樣は當然それを考へてゐたのが口に出たまでゞある、これも相手に返答を求める爲に云つたのではない、
「さうなると、わたしは一應、伊吹へ歸らなければなりません、その間、あなたはこゝに靜止としてゐらつしやい、動いてはいけません――」
と、今度は、相手に向つて宣告を下したのです、なほ、その宣告につけ加へて、
「わたしが、また此の宿へ戻つて來るまで、この一間で靜止としてゐらつしやい、犬を斬

りに出てはいけません、もう此の邊には斬つて斬り榮えのする者は何もゐませんから、それに、このだゞつ廣い加藤清正の屋敷あとなんですもの、隱れてゐるには恰好ですよ、宿へいひつけて、ありますから、誰も氣兼はありません、おとなしく構止として待つてゐらつしやい」

二三

お銀樣は龍之助に監禁を申渡して置いて、

「ですけれども、誰かお給仕がなくてはいけませんねえ、誰か、しよつちうついてゐてあげる者がなければ生きられない人なんですから」

とつけ加へて、當惑がりました。

「なあに、一人だつて構はないよ」

と龍之助が、ブツ切つたやうにいふ。

「かまはないことがあるものですか、さし當り、誰が朝夕の御膳を運んでくれますか」

「女中がゐるだらう」

「女中任せなんぞに出來る人なら心配はありませんよ」

「では、宿のおかみさんか誰か」

「宿のおかみさんといふのは、まだ若いのです」

「若くつたつて、かまはない」

「こちらは構はなくても、あちらが可哀さうです」

「どうして」

「どうしてたつて、あなた、あなたといふ人は人の若いおかみさんが好きなんでせう」

「何を云つてるのだ」

「わかつてますよ、それに、此の宿のおかみさんは、若くて、愛嬌があつて、上方風の美人なんです」

「それがどうしたといふのだ」

「そればかりぢやありません、こゝは近江の長濱といふ所ですよ」

「長濱はわかつてゐる」
「さうして、此の宿は長濱の濱屋といふ宿なんです」
「それも、前から聞いてようくわかつてゐるよ」
「そればかりぢやないのです、その若いお内儀さんの名前が濱つて云ふんです」
「え」
「驚いたでせう、そのお内儀さんを、あなたの所へ出せますか」
「うむ——」
「どうです、さう聞いてゐるうちに、そら、もうあなたの血の色が變つて來ました、可哀相に、これでもう此の宿のお内儀さんが見込まれてしまひました。わたしといふ人も、うつかり云はでもの事に口を辷らした爲に、また一つの殺生をしてしまひました。これではとても、此處へ一人殘して置くわけには行きません、と云つてこの人をわたしが連れて白晝何處へ歩けますか、夜更には猶更あぶないものです」

二四

伊吹の新館のお銀樣の居間で、お雪ちやんが頻りに桔梗の花を活けてゐる。
お雪ちやんとしては、お銀樣に出し抜かれて湖水めぐりをされてしまつたやうなものゝ、それでも心からお銀樣を恨むといふことも憎むといふほどのこともあらう筈はなく、今では十分の好意をもつて、その不在の間にお花を活けて、床の間への、心づくしをして置いて上げたいといふ氣持にまでなつてゐるのです。
思ふやうには活けられないけれど、せめてお銀樣に笑はれないやうに——あゝもかうも と枝ぶりに精をこめてゐる間に、つひ我を忘れる氣持にまでさせられてしまひました。藝術的氣分とでもいふものでせう——無心になつて花を活けてゐると、その後ろから不意に物影が暖かくかぶさりましたのに、無心の境を破られて、はつと見向くと思ひがけなく、自分の背後にお銀樣が例の覆面のまゝで、すらりと立つて、こちらを見下してゐるではありませんか。

「まあ、これはお嬢様、お歸り遊ばしませ」
お雪ちやんは少し周章てゝ、ゐずまいを直して挨拶をしますと、お銀様は
「大さうお上手ですね」
「いゝえ、お恥かしいんでございますよ」
お雪ちやんは恥かしさうに、申譯をすると、
「結構ぢやありませんか」
「否え、お嬢様のお留守の間に、ほんのお笑ひ草までにと思ひまして」
「どうも有難う」
「ほんとにお恥かしい……」
「全くお見事ですよ、わたしなんぞには、とてもさうは參りません」
「どういたしまして、お嬢様なぞはお仕込が違つてゐらつしやいますから」
「天性のものですね、わたしなんぞ幾ら稽古をしても無器用なものですから」
「いゝえ、お嬢様は萬事に筋がよくつてゐらつしやいますから」

「藝事ではお雪ちやんにかないません」
「どう致しまして」
「それで結構です、頂戴して飽かずながめることに致しませう——お手並もよいが、花の撰みも悪くございません」
「少しでもお氣に召しましたら、わたし本望でございます」
「部屋全體が、これですつかり落つきが出來ました——お雪ちやん、そこはそのまゝにしてあとで誰かに片づけさせませう、早速ですが、一つあなたに頼みがあるのです」
「何でございますか」
「あのね——」
「はい」
「御苦勞ですけれども、お雪ちやん、これから、あなたに一つ長濱まで行つていたゞきたいのです」
「長濱までゞございますか」

「はい、長濱へ行つて、暫くあそこに泊つてゐていたゞきたいのです、しばらくといつても、さう長い間ではありません、精々五日か十日」
「承知いたしました、どういふ御用か存じませんが、お嬢様のおつしやるお言葉でしたら……」
「それでは早速お頼みしますが、長濱へ行きますと、濱屋といつて古い大きな構への宿屋があるのです、そこへ裏木戸から行つて、お雪ちやんに、暫く泊つてゐていたゞきたいのです」
「宜しうございますとも、いつでもお伴を致します」
お伴と云はれて、お銀様の言葉が少しセキ込みました。
「否え、わたしは行きません」
「では」
「お雪ちやん、あなた一人で行つて泊つてもらひたいのです」
「わたしが一人で、その宿へ泊りに行くのでございますか」

「えゝ——一人で行つて、向うに人がゐますから、その人の介抱をして貰ひたいのです」
「まあ——どなたかのお世話をして上げるのでございますか」
「それはね、行つて見ればわかります」
「でも……」
と、こんどは、お雪ちやんの言葉が淀みました、お雪ちやんとしては、お銀様のお伴をして長濱まで行くものとばつかり思つてゐたのが、そのお銀様は行かないで、自分一人で行け、行つた先きに人がゐるから、その人を介抱に——しかも、その人は誰か、行つて見ればわかると云はれるほど、お雪ちやんの氣分がわからないものになります。

二五

「ねえ、お雪ちやん、あなたは、わたしのたつた一人の妹でせう、たしかにその筈です」
「勿體ないことです、わたしは、お嬢様にさうおつしやつていたゞきましても、あなた様の御家來のつもりで居ります、御姉妹なんぞ及びもつきません」

「では、もし假に家來として置きますと、尙更わたしの言ひつけを反きはしないでせう」
「反きませんとも、お嬢樣のおつしやることならば、火水の中でも」
「では、默つて、長濱へ行つて下さい、さうして濱屋の裏の木戸口へ行きますと、刎橋があります、そこから入つて、しるしがしてありますから、誰にことはる必要もありません廊下傳ひに行きますと、秋草の間といふのがありますから、そこへ入つて行くと用向がすつかりわかるやうにしてあります」
「承知いたしました」
お嬢樣の爲ならば火水の中までもといつた手前、お雪ちやんは無條件でその言ふ事を聞き從はなければなりません。
「さうして、つまり、病人がゐるのです、その看病を心ゆくばかりあなたに賴みたいのです」
「御病人の看病でございますか、承知いたしました。わたしで出來ます事ならば、出來ます限り」

「出來ますとも、あなたでなければならないのです」
「いゝえ、わたしは御病人の看病なんぞ、あんまり慣れませんから」
とお雪ちやんが謙遜し服從しながらも、心の中では合點し難いものが多いのです、病人の看護は賴まれゝば出來ない限りはないが、わたしでなければならない病人の看護といふものがあるべき筈もないでせうのに、お銀樣の言ひ廻しが、どうも少し變だと思はれないではないが、やはり、絶對服從を誓つてゐる以上は、反問は許されないことで、お雪ちやんとして此のお嬢樣の特異性を心得てゐるばかりか、この頃では、心から崇拜する信仰的にさへなりつゝあるのですから、否やはあらう筈はありません、お雪ちやんを退引させないやうにして置いてから、お銀樣はなほも疊みかけて云ひました。
「その病人は、病人の癖に、退窟がつて出歩きをしたがつていけないのです、殊に夜分は氣をつけなければいけませんから、お雪ちやん、あなた、目を離さずついてゐて、一寸も外へは出さないやうにして下さい、尤もあなたがついてゐれば、お出なさいといつても出

ないかも知れません」
「そんな筈はございません」
お銀様の言ひぶりが、いよ〳〵消化しきれないものがあるので、その申譯もお雪ちやんとしていよ〳〵要領を得ないものになる、それをもお銀様は押しかぶせて、
「でも、さうしてゐるうちに、わたしも行くでせう、さうしたら、その人達と一緒に竹生島へでも參りませう、湖水めぐりもやりませう」
「それは嬉しうございます」
お雲ちやんがお禮を云ふ、お銀様は冷然として。
「では、これから直ぐお頼みします、行きだけは誰かに連れて行つて貰ひませう、あゝ誰かといふより、友さんがいゝでせう、米友さんに頼んで送つて行つて貰ひませう」
「あ、お嬢様、その米友さんでございますが……」
こゝで、お雪ちやんの氣色も言葉もガラリと變つてしまひました。
「友さんが、どうかしましたか」

「あの、お嬢様、米友さんの行方が知れなくなつたのでございます」
「どうして」
「何でも、お嬢様がお出かけになつて間もなく、やつぱり長濱の方へお出かけになつたまゝ、音沙汰がないのださうでございます」
「あの人の事だから……」
お雪ちやんが、あはたゞしい割合に、お銀様は冷淡な挨拶です、それといふのは、行方不明といつたところで、あの男のことだから、やがてひよつこり歸つて來るだらう、或ひは、もう立ち歸つて料理場の隅に好きな栗でも茹でゝゐるのではないかと云つた程度のものです、ところが、お雪ちやんの不安な色は容易に去らないで、
「いゝえ、それが只事ではないらしうございます、役人に捕つて晒らしとやらにかけられてゐるといふやうな、不破の關守さんのお言葉でしたが、悉しいことをわたくしに知らせて下さらないのが、一層心配なんでございます」

二六

米友の行方については、お銀樣もお雪ちやんも關心の限りでないことはないが、さりとて、上の如き運命が今や盛んに米友の上を見舞ひつゝあるとは、お雪ちやんはもとより、お銀樣と雖も想像の限りではありませんでした。

そこで、二人共、米友のことについては、ちよつと暗い思ひをしましたけれども、お銀樣は忽ち平靜に返つて、お雪もやんに向つていひました。

「では、お雪ちやん、賴まれて下さいね、米友さんがゐなければ誰でもいゝ、誰かに附添つてもらつて、乘物でおいでなさい」

「いゝえ、長濱までは三里の道でございませう、わたし、その位歩くことは何でもございません」

「否え、それには及びません、乘物と云つても馬はあぶないから駕籠でゐらつしやい」

「いゝえ、徒歩で結構でございます」

「それはいけません、さうしてね、着物も着換えてゐらつしやい、髮も結ひ直してゐらつしやい」

「有難うございます」

「あの、戸棚を開けてごらんなさい、二重の亂箱の下の方が、あなたの爲にこしらへて置いた着物です」

「まア――」

「それから、お雪ちやん、あの鏡臺をこゝへ持出して下さい、わたしが、あなたに髮を結つて上げます、上手ではありませんけれど」

「まあ、お嬢樣、それはあんまり勿體ない事でございます」

「いゝえ、かまひません、わたしも久しく女の髮を手がけませんから、變なものが出來るかも知れませんが、結はせて下さい」

「ではお言葉に從ひます」

この女王の云ふことは、高壓である、好意をもつて云つてくれるにしてからが、命令と

より外は誰にも響かない、お雪ちやんと雖も、それ以上辭退する力は無い。

程なく鏡臺の前へ坐らせられたお雪ちやんは、申譯のやうに、

「あれから、わたしは髪を結んだことがございません、いつもこの通りにして居りますから、もう、すつかり癖がついてしまつて、とてもお結ひにくいことでございませう」

こゝにお雪ちやんが、あれからといふのは、ドレからであらう、お雪ちやんが斯ういふとでありました。それが又、女王樣の手にかゝつて新たに結び直されやうとする、此の女王は果して、この少女の髪を、いかやうに扱ふつもりか知らん、それは任せるだけであつて問ふことを許されない、許されないわけではないけれども、お雪ちやんはまぶしくて尋ねられない、その座へ坐らせられて見ると、髪を結ふことは愚——首を斬るといはれても反問は出來ない。そんなやうな心持でお雪ちやんが神妙に髪結ひの座に直つてゐると、後へ廻つてお銀樣は、梳き手のするやうに、櫛を入れて、癖直しにかゝりながら、

「今日は島田に結んで上げませう」

「まあ——」

お雪ちやんは、我知らず顏が眞赤になりました。

「お雪ちやん、あなたは島田よりか桃割が似合かも知れない、桃割に結つて見て上げたいとも思ふけれど、それではあんまり子供らしいから」

お銀樣の手先きの存外器用なことにもお雪ちやんは驚かされました。手先きが器用だけではない、この人は、人の髪を結つてやることが好きなのだと思はずには居られません、人の髪を結つてやることが好きといふよりも、人の髪を結つてやることに於て、自分の藝術心に滿足を求めてゐるのだとしか思はれないことほど、非常に丹念に繪を描いたり彫刻したりするやうな氣分を、はつきりと見て取ることが出來ます、

「お嬢樣、あなた樣は、どうしてまあ、髪上げなんぞにまで斯うもお上手でゐらつしやいます」

と、やつとこれだけの推稱をして見ますと、お銀樣は

「長濱へ行つたら、この次にはお雪ちやんを丸髷にしてあげます」

「え」
お銀様の云ふこと、爲すことの意表に出づることは、わかり切つてゐながら、その度毎に、お雪ちやんの膽を奪うことばかりです。

二七

「お嬢様、丸髷なんて、それはあんまり……」
桃割のきまりの悪いよりも、お雪ちやんに取つて丸髷と云はれることは、なほ一層きまりが悪い程度を越して氣味が悪い、と云ふた方がよいでせう、さうすると、お銀様が何かしら少々の自己昂奮を覺えたもの丶如く
「否え——もうお雪ちやんは丸髷に結つても似合はないことはありませんよ」
「御冗談を……」
「桃割から島田になり、島田から丸髷にうつる時に女が女になるのです、ですから丸髷といふものは憎いものです」

お雪ちやんは何と挨拶してい丶かわからない
「でもお嬢様、丸髷つてい丶ものでございますね、あんな粋で人がらな髪はございません」
「お雪ちやん、あなたも丸髷がお好き」
「え、わたし、自分はそんな柄ではありませんけれど、好きなといふ點から云ひますと、あんな好きな髪はありません」
「わたしも、丸髷は大好き……」
「お嬢様、あなたこそ、丸髷が全くお似合になりますよ、すらりとしたお姿に、粋で高尚な丸髷を結んでごらん遊ばせ、それこそ、わたし達女が見て、うつとりするお姿になるでせうと思ひます、ほんとに、お嬢様の丸髷姿こそ、どんなにお人柄でございませう」
「さうか知ら」
「丸髷は江戸風がよろしうございませうか、京風でございませうか、長濱にも、きつと上手な髪結ひさんがゐることでせうから、お嬢様、今度は、あなたこそ、丸髷にお結ひ遊ばして、お見せ下さいまし」

お雪ちやんが斯ういつたのは、あながち、お銀樣の意を迎へる爲にばかり云つたのではない、事實、お銀樣その人の姿形といふものを見てゐるうちに、殊に、そのすらりとした後ろ姿などを見せられる時は、女ながら、うつとりさせられてしまうことは、度々なんでした。日頃、心にあることが、うつかり口へ出ただけなのでしたが、その言葉と共に、お銀樣の元結を結ぶ手が、ブルッと異樣に顫えたのを感づくと、電氣に打たれでもしたやうにハッとして

「失策つた！」

と、これは口には出さなかつたが、自分ながら、鏡にうつる面の色がさつと變つたのを氣づかずには居られません。

この女王樣に、髪を結つて見せろと云つたのは、いかに重大なる禁忌に觸れたのではなかつたか。

姿のいゝことばかりを考へてゐたが、その首から以上の神祕に於ては、おち雪やんは今日までついに何物にも觸れてゐないし、許されてもゐない、此の女王樣が、朝から晩まで

屋外にあると室内にあるとを問はず、祕密を守り通してゐる此の覆面の中の神祕は未だ曾てお雪ちやんの前に開かれてゐない、お雪ちやんとしては、女王樣の威力に壓倒せられて仰ぎ見ることが出來ないと云つたある程度の憚かりもあるが、同時に女性として、包み隱さねばならぬ程の祕密を、かりそめにも發きうかゞうには忍びないといふしほらしい惻隱もある、そこで、お雪ちやんは、今日まで起居を共にしてゐても、お銀樣の首から上の形態は問題にしてゐない、その頭腦の精鋭には心服してゐるが、形態的には首から上の先天的に存在しない人として、この女王と應待するに慣らされてゐる。ところが、たつた今、不用意で云つたことは、明らかに此の禁忌に觸れてゐたといふことを、口を辷らしてはじめて氣がついたのです。

「わたしは、人の髪を結つてあげることは好きだが、自分の髪を結ふのは嫌ひです、自分の髪の毛が、どんな色に變つてゐるか、それは見たこともない、見ようとも思はない……見ようとも思はないものを、人に見せるわけには行きません」

と、お銀樣の言葉は存外平調でしたから、お雪ちやんもホッとしました。

髪を結ひ終ると、お銀様が

「では、お雪ちやん、あの衣裳箱をとり出して、あなたの身に似合ふ着物を見立てゝ下さい、いゝえかまひません、上も下も皆んな抽斗を拔いて見て下さい――わたしが手傳つて着つけをして上げませう、長濱は縮緬の本場で、衣裳の事には皆んな目が肥えてゐるでせうから、笑はれないやうにして行つて下さい」

お銀様の結ひ上げた島田の出來榮えに、お雪ちやんはのぼせるほど興味を感じてゐるところへ、立てつゞけに衣裳の詮議、それもこの場に於ての有ゆる豪華を盡くして展開されようといふのですから、お雪ちやんはわく〳〵として別の世界へ連れて行かれる氣分にさせられてしまひました。

二八

やがて出來上つたお雪ちやんの粧ひは、結綿の島田に紫縮緬の曙染の大振袖といふ

目もさめるばかりの豪華版でありました。この姿で山駕籠に搖られて行くと、山駕籠が寶惠駕籠に見えます。

春昭から長濱へ行く、なだらかな道筋、その駕籠側に小風呂敷を引脊負つて附添つて行くのは、近頃この王國の御飯炊きになつた佐造といふお爺さん、人里近くなるにつれて村人村童の注視の的とされずには置きません。

「あれ綺麗な人が通るよ」

「お人形さんみたいのが通るよ」

「駕籠おで何處ぞのおいとはんが通りなさるよ」

「まあ、綺麗」

「立派だな」

「何處のお娘はんだすやろ」

「あ、ありやお輕さんだぜ」「おゝお輕さんだ」

「お輕さんなら山科へ行かるゝのでおまつしやろ」

「いゝや、お輕さんは祇園へ賣られて行くんだつせ」
「祇園だわ」
「京の祇園へ、おいとはん、賣られて行くんだつせ」
「可哀相に――」
「あの年でなア――」
「お輕はん、可哀相に」
彼等は、口々にお雪ちやんをお輕にしてしまひました。
山科から祇園へ賣られて行くお輕さん、多分、村人村童たちは、村芝居の教育によつて駕籠に搖られてゐる美くしい女を、一圖に、お輕と定めてしまつてゐるらしい。お雪ちやんはそれを聞いていゝ氣持はしない、いゝ氣持のしないのは、今に始まつたのではなく、最初から斯ういふ極彩色に自分の身をして町に下らしめられることが本意ではなかつたのです。お銀樣の意志によつて、かういふ事にさせられて見ると、恥かしいやら、可笑しいやら苦しいやうな、擽ぐつたいやうな氣分にさせられてしまひましたが、それでも若い娘

の事ですから、美しい粧をさせられたといふことに、堪へ難い嫌惡の念は起しませんで、どうかすると、一種の得意の念をさへ催して、年にも似合はず老けてゐた自分といふものを、急に青春に取戻したやうな心持にもなつて見たが、村人村童から、忠臣藏のお輕に見立られて、祇園一力への身賣道中にさせられてしまつたことには、笑つてゐられないものがありました。
「お輕さんだぜ、ほら、お爺さんが附添つてゐるだらう、あれが與一兵衛はんだつせ」
「おゝ與一兵衛さん……」
お雪ちやんがお輕にさせられた卷添えを食つて氣の毒に佐造老爺が、與一兵衛にされてしまふ、誤解も誤傳も、慣れてしまへば餘り氣にはならない、本來捌けた氣風を持つてゐたお雪ちやんは、長濱へ近く、漸く人の眼と口とに慣らされて來ると、もう全く度胸が据つてしまひました。何とでもお見立てなさい、また何とでも品評をおつしやい、わたしはかうさせられた、此の身上で行くところまで行きますよ、珍らしければ、いくらでも御覽なさい、見られるだけで、穴は明きませんよといつたやうな自暴に似た度胸にまで變つて來

て見ると、却つて自分が人から注視の的とされることに、幾分の得意をさへ感じないではありません。

さて、こんな見榮だか、曝らしだかわからない身上で、わたしは一體何處へ落つくのだらう、お銀樣から落つくべき繪圖面は事細かに書いて貰つてある、そこへ落つきさへすれば萬事は定まることはわかつてゐるが、落つく先きの空氣と、相手になるべき人の身の上の事は一向にわからない。

二九

そのうちに、お雪ちやんは、ふいと、こんな氣持になりました。

「では本當は、わたしはお輕さんと同じ運命に賣られて行くのではあるまいか、與一兵衞さんに見立られた佐造老爺さんは、實はぜげんの源六といふ人ではないか、長濱へ用向とは表面上、わたしは、眞實は賣られて行く身ではないかしら、もしか眞實に、わたしがあの忠臣藏のお輕さんと同じ運命に置かれた身であつたとしたら、わたしはどうしやう」

といふやうな空想、お雪ちやんは最初から相當なロマンチストでありますから、駕籠に搖られながら、思はず忠臣藏の劇中の人に身を置いて、あの芝居の中の最高潮の悲劇のことをとつをいつ考へ初めましたが、いつしか、そんな空想も破れて、それはあるべき事ではない、第一お銀樣といふ人が、わたしを欺して賣るなどと、そんな事のあらうお人柄であらう筈はない——一體、わたしは何の爲に、どうして、こんな盛裝までさせられて送られねならないのか、單にお銀樣その人の好奇の犧牲としての、この成行であらう筈はないが——問ふて見ても許さるべきで無かつたし、問はない方が却つて氣休めであると思つて、かうして送られて行くが、行く先きの事が、考へれば考へるほどわからない、人の看病といふことにしても、何も、それだけなら、殊更らに、わたしを煩はさなくとも、幾らも他に人はあらうものを、わたしでなければならないやうな此の仕打——それをお雪ちやんが、また駕籠の中で思ひめぐらしてゐるうちに、漸くはたと氣がついた事がありました。

あゝさうだ、昨日、不破の關守さんのお話の末に、ふと、お銀樣のお父樣が、こちらへ旅をしてお出でになつたとの事、それを小耳にはさんだやうに覺えてゐるが、それで分つ

た。お銀様のお父様がその長濱の濱屋とやらに泊つてゐらつしやる、お銀様としては、あの氣象でお父様を取持つことは出來ないから、それで、わたしを代りに――それ〳〵、それに違ひない、お銀様のお父様といふ人は、甲州第一のお金持ち、その大家の長女としてのお銀様との間に、何かいふに云はれない悲しい事情がおありなさるといふことは、わたしも薄々聞いてゐた、父に反いた娘を、父の方から見届に來るといふことも、また有りさうな親心。

お雪ちやんは、さう合點をして見ると、急に明るい氣持になりました。その役目としてわたしが選ばれた上は、出來るだけお銀様のお父様の御機嫌もとり、なほ出來るならば父と子との間の、相剋の融和の足しにもなつて上げたい、これは全く光榮のある役目に遣はされたものだ、それだけ責任といふものも重きを加うる所以で、お銀様のお父様のお氣に入られないまでも、あんな卑しい女とさげすまれないやうに心掛けなければならぬ、その點もあればこそ、お銀様も斯うしてそれとなくわたしの身だしなみにまで心をつくして下さつたのだと、それで萬事が呑み込めました。

お雪ちやんは、こんな心持になつて見ると、世間が明るくなつた思ひでしたが、日はいつしか暮れ方で、早くも長濱の町に入つて、與一兵衛どの〻案内知つた手引きで濱屋の裏口に着いてゐました。

濱屋の表から案内を頼むには及ばない、萬事は繪圖面に描いてもらつてある、鍵をあづかつてゐるから、直接に裏口の木戸からと云はれる通りに、その邊で下り立つて夕まぐれひとり、濱屋の裏口の木戸に立つて行きますと、石疊の二間ばかりの堀に町としては美しい水が流れてゐて、そこに刎ね橋がある。

そこを渡つて、木戸の錠前を外から開けにかゝつた時に、お雪ちやんがまた何となく慘慘な氣分に打たれました。

三〇

湖畔に斯ういふ突風が起りつゝあることを知るや知らずや、道庵先生は拔からぬ面で大津の旅宿鍵屋の店前へ立ち現はれました。

「わしや江戸の下谷の長者町の道庵といふものだが、此の宿に同じ江戸者で、お角さんといふ下つ腹に毛の無えのがゐる筈だ」

と、いきなり店先きへ怒鳴り込んだものです。江戸の下谷の長者町の道庵と自らを名乗ることも宜しい、同じ江戸者で、お角さんといふ相手の名を呼ぶのも宜しいが、下つ腹に毛の無いといふのは餘計なことです、下つ腹に毛があらうとも無からうとも、此の場合、そんな餘計な事を附け加へる必要は斷じて無い、この點ではいきなり玄關拂ひを食ふべき無作法だが、不思議と宿では

「それ、お出でなすつた」

この無作法千萬なる來客を、待つてゐたとばかり、帳場も男衆も駈け出しといふ體で、下へも置かず、手をとつて、早くも座へ招じ上げやうとする。

「まあ、さうお焦きなさるなよ、醫者だからとて旅へ出たら少しは樂をさせてもらいてへ、旅人だよ、この通り、旅路だから草鞋脚絆といふ足ごしらへだあな、先づゆる〳〵これを取らしてお呉れ——それ、お洗足の用意々々」

道庵は、上り口へどつかと腰を卸ろして、泰然自若たるものです。

「さあ、お脚絆、さあ、お草鞋——さあさあ、お洗足……」

全く下へも置かず、頭の慈姑を摘み上げんばかりのもてなし、道庵としては全く初めての振りのお客である、馴染でもなければ定宿でもないのに、いくら下へ置かぬ商賣だからといつて、これは餘りに要領が好過き、呑込みが好過き、サーヴイスが有り過ぎる——と一應は、さうも受取れますけれども、これ、あながち、その根據が無いわけではないのです。

お角さんは道庵の來るのを待ち兼ねてゐて、いつ何時、これ〳〵かういふ人が、尋ねて來るかも知れない、必ずよつぱらつてお出でになり、口には大さう毒を持つてゐるから、そのつもりで扱つて上げて下さい。なアに、口に毒は持つてゐるけれども、御商賣は藥を扱ふ江戸でも名代のお醫者さんだから、失禮の無いやうに、もしわたしが不在でもかまはず部屋へお通し申して、出來るだけ叮嚀に扱つて上げてお呉れ、さうして、また御酒が大好きなんだから、吟味したところを、いくらでも御所望次第差上げてお呉れ、お看もこの

琵琶湖の撰り抜きのところを、なあに、いくら召上つても正氣を失ふやうな先生ではない、わたしが歸るまで、さうして出來るだけ叮重に取持つて置いてお呉れ——

かういふことが、お角さんから兼ね〳〵吹き込んであるものですから、宿でも先刻心得たもので、

「それ、お出でなすつた」

車輪になつて、お角さんの申しつけて置いた通りに、サーヴイスをはじめたものです。

斯くて、足も取り、洗足も終つて見ると、早速通されたところは、お角さん借切りの豪華な一室でありました。

御腰を据えるとたん、早くもお銚子の催促であり、その催促を皆まで云はせない先きに、續々とお好みの見つくろいが取揃えられる手廻しぶりに、道庵すつかり悦に入つてしまつて

「どうも、これだから、上方の奴は油斷がならねえ、殊にこの江州者と來ては、昔しつから近江泥棒、伊勢乞食といつて、こすいことにかけては泥棒以上だから油斷も隙もありやしねえ、道庵來ると見て、ハイ灰吹きの格で、このサーヴイスぶり、いやはや全く、江州者には油斷がならねえ」

と早くも、盃をとりながら斯ういふ御託宣ですから、給仕に立つた女まで呆れた面をしました。

幸に、この給仕女が他國者であつたからまづ無事とは云ふものゝ、その土地へ來ていきなり

「近江泥棒、伊勢乞食」

と浴せかけるなんぞは、いくら何でも毒が有り過きて、相手が氣の短かいものなら、張り倒されるに定まつてゐるが、これは多分山城の場末あたりから來た新參の女中だつたのでせう

「ホ、ホ、ホ、仰山、御機嫌よろしうおますな」

「おますよ、おますよ、おましちまわあな」

他愛もなく道庵も駈けつけ三杯を納めることが出來ました。

三　一

道を抛げて伊吹山へ侵入した道庵が、どうして、いつの間に、こゝまで來着したか、順路を、彦根、八幡、安土、草津と經て、相當の乘物によつて乘りつけたか、或ひはまた徒歩でテク〳〵とやつて來たのか、さうでなければ、一旦、長濱へ出て、あれから湖上を、こゝまで舟で乘りつけたか――たゞしは例の脫線ぶりあざやかに、湖水の北岸廻りをして野洲から比良比叡の山ふもとを迂廻して來たか、その詮索は一まづさし措いて、もし徒歩で、テクつて來たとすれば――道庵先生は老ひたりと雖もあれでなか〳〵平地を歩かせては達者なものです。それは裏宿七兵衞や、がんりきの百藏と云つたやうな生れ損ひの足とは比較にならないけれども、脊が高くて、コンパスが長いだけに、足には充分覺えがあるのですから――相當な突破をしてゐると見ても宜しいのですが、陸路を來たとしても八幡、彦根、安土の順路を取らなかつたことは慥かです、何となれば草津街道へかゝりさへすれば、忌でも、昨今のあの「晒らし」を見ないわけには行かない、あの「晒らし」が一

目なりと道庵の眼に觸れた以上は、さア事です、その沸騰は、まさにお角さん以上と思はなければならない、それが無事で、こゝへ來てゐるといふのが、あの晒らしの現場を通らなかつた證據――と云へば云へるに違ひないが、それにしても、もしまた駕籠か馬でもハリ込んで搖られながら、いゝ氣持の鼾栄先生氣取りで

「乘せたから先きは……」

なんかんと納まり込んで、さしも街道名代の草津の晒し場をムニヤ〳〵のうちに突破してこゝへ無事に到着の段取りと解釋の出來ない事もない。

いづれにしても、道庵先生は自分が唯一無二の股肱と頼み切つた米友が、今日明日のうちに首がコロリといふ、際どい危ない運命のほどを一向に御存知無いことだけは確かなものです。

さればこそ、この油斷も透きもない、持てなしを遠慮會釋もなく引受けて、太平樂に納まり込み、

「江戸を一歩々々と離れるのは、そ　れだけ故郷に對して一歩々々と淋しくもあるが、京

へ一歩、近づく程に酒がよくなるのは有難え、江戸は道庵が第一の故郷である、酒は第二の故郷である、第一の故郷を離れて、第二の故郷へと進んで行くんだ、有漏路より無漏路に歸る一休みと一休坊主が云つたのは、こゝの呼吸だらうテ」

途方もない出駄羅目を云ひながら、たしかに吟味してある酒と、これは吟味しなくとも自ら備はる湖上の珍味とを味ひつゝ、ひたすら興に乘つてしまひ、一體訪ねて來た相手のお角親方は何處へ行つた、いつ歸るのだと駄目を押すことさへ忘れてゐる、この酒とこの肴さへあれば、尋ねる主などはゐてもゐなくても差支ないといふ、御腰の据えぶりでしたが、宿ではあらかじめかなりにその豫備智識が吹き込んで置かれてありましたから、さのみ驚ろきません。

道庵先生は、いよ〳〵御機嫌斜めならず、頻りに管を捲いたり、取りとまりもないことを口走つたりして居りましたが、相手の年増女中が一向氣の無いのを見て取つて、

「お前、あつちへ行きな、おらあ、ひとり者なんだから、この手酌でチビリ〳〵といふ奴に馴れてるんだ、さうして置いて、頃を見計らつて、お代りお代りと、持つて來てそこへ

置きつぱなしにして、さうして行つちまひな——いゝ、おらあ、ひとりで、チビリ〳〵と獨酌といふやつでねへと、酒が旨く飲めねえたちなんだから——」

と、また一本の德利を逆に押し立てゝしたみまでも、しみつたれに猪口の中へたらし込みながら顔でさう云ひましたから、女中も心得て

「それでは、失禮させていたゞきまんな、御自由にたんとお上り遊ばせ」

女中を押拂つてしまつた道庵は、いよ〳〵いゝ氣になつて、獨酌の天地に自由陶醉をはじめる。

一杯、また一杯——京も大阪も皆んなこの道庵を迎へる爲に存在してゐる天地のやうに心得て、いよ〳〵太平樂をならべてゐるうちに、醉眼を見はつて、そろり〳〵と此の部屋の中を見廻しました。

相當に凝つた作りの此の雜作を見廻し、關東風の旅籠との調度の比較などを試みてゐるうちに、部屋の一隅に張りめぐらした六枚屏風に屹と醉眼を留めて、鋭く中を見込むやうなこなしをやりました。鋭くと云つても、朦朧たる醉眼に強いて力を入れての虚勢ですか

ら、威力のないこと夥しい、併し、何か感じたことがあると覺しく、幾度か眼に力を入れ直しては、この六枚屏風をためつすがめつ、

「怪しい、この屏風の中が怪しいと睨んだ」

三　一

道庵先生が醉眼を見張つて、この屏風の中こそ怪しけれと不審をうつたその屏風の中には、何等の物音もしないのだけれども、さう云はれて見れば、たしかに、物の氣がその中にあるらしい、たとへ物音はしないにしてからが、物の氣が中にあるのと無いのとは、辨信法師ならずとも勘によつてわかる人にはよくわかる。

たしかに此の中に物の氣ありと見てとつた、いや勘で受取つたらしい道庵は、もう放すことではない、今まで、ひとり天下で、何を當ともなく、捲いてゐた管槍のやり場を、この屏風に向つて集中し

「たしかにその屏風の中が怪しい、七尺の屏風の中こそ怪しけれ」

と、云つても、立つて摑みかゝつて引き剝いで見るやうなことはしない。

「七尺の屏風も躍らばなどか越えざらむ、綾の袂も引かば、などか斷えざらむ」

朗詠まがひの鼻唄になつてしまひましたが、次には、そんな優雅なのではなく、

「コン畜生、やい近江泥棒——」

と惡態を吐いてしまひました。

「その屏風の中にゐるのは、近江泥棒だらう、油斷も隙もならねえが、餘人ならばいざ知らず、この道庵の眼をくらまさうなんぞとは、近江泥棒もすさまじいぞ」

近江泥棒を連發するのは甚だ聞き苦しい、單に聞き苦しいだけではない、惡態も品によりけりで、その國人を泥棒呼ばはりすることは、重大な名譽毀損であつて、人によつてはなぐられる、醉つてはゐながらも、性根を失はない道庵は、さすがに、そこに氣がついたと見えて急に

「ハ、ハ、ハ」

と、いやに笑ひくづして

「と、いつたものさ、近江の人に云はせると、近江泥棒、伊勢乞食と云ふあれは、語呂の間違ひで、本當は近江殿御に伊勢子正直といふんださうだ、その方が正しいのださうだ、處で、近江の人間は商賣が上手でその道で成功する、伊勢の人間は貯蓄心に富んでゐるから金持になる。近江の人間が成功して大商人になり、伊勢の人が金を貯めて金持になる、それをケチな奴等が嫉んで、悪口を云つたのが卽ち近江泥棒伊勢乞食となつたのだ、他の成功を羨やむケチな了見の奴が、得てして眞面目正直の成功人種をとらへては、さういふケチをつけたがる、取るにたらねえよ、怒んなさるな、ハ、ハ……」

と道庵が、自分で、辯解をつけて、いゝ加減に如才なく笑ひ崩したところは、やつぱり旅へ出ての引目である。この先生の食へない一面である。

さういふ、下らないことを口走りながらも道庵は、やつぱり屏風に着物た醉眼をしつこくして、

「と云つたものだが、屏風の中にゐらつしやるのは泥棒だか、聖人だかわかりはしねへ、この近江の國には泥棒もゐるかゐねへかその事はよく知らねへが、聖人だけは確かにゐるその點は道庵が保證する、近江聖人といつても立派な聖人がゐる、こいつはゴマかし者ぢやねえ、近江聖人は本場の唐へ出しても立派な聖人で通る男だ本格の聖人だ、近江なんぞへ置くのは惜しい男だよ、あゝいふのには道庵も頭が下がるねへ——處で、その屏風の中にゐらつしやるのは、泥棒でゲスか、そも〳〵また聖人でげすかな、然らずんば君子——君子でげすかな、君子、君子、君子にも梁上の君子といふ奴がござる、大方その梁上の君子といふ奴でござらうな、盗人の晝寢と云つてな、白晝、人の家に忍んで晝寢をする奴は油斷がならねへ、名乘んな、尋常に名乘んな、名乘つて出ればお近づきに一杯飲ませて上げるが、いよ〳〵狸とあつて見れば、退治るよ」

と、云つたかと思ふと、道庵がすつと立ち上つて、屏風に向つて歩み寄つて來ました、

白ばつくれてはゐるけれども、道庵として合點なり難き一應の不審を感じたればこそ、管まきにかこつけて一應の檢討をして見ようといふ氣になつたらしい。

道庵先生の勘といつても、それは勿論、辨信法師のやうな鋭いものではないけれども、さすがその道の名人（？）だけのものはあつて、この物の氣に、たしかに何等かの異常を感得したものではあるやうです。

留守であるといへば、人のゐない此の部屋にたしかに何者かゞゐる、屏風の中に物の氣がする、もし、從者だとすれば、主人の不在をつけ込んで、主人の寢床にもぐり込むなんぞは圖々しい、まさかお角が旅にまでイカモノを卿へ込んで隱して置く筈はない、そこに道庵が不審を打つたのもさすがに眼が高いものです。

案の如く、この屏風の中には、がんりきの百藏といふやくざ野郎が先刻から息を殺してひそんでゐる。

臭いところから侵入して來て、お角を焚きつけて置いてから、自分はこの部屋へ納まり込んで、早速の事に戸棚から夜具布團を引つぱり出し、有り合せの六曲を引めぐらすと、いゝ心持で足腰を伸ばしてうつら〳〵としてゐる處へ、不意に道庵先生の御見舞です、最初のうちは、お角が立ち戻つたのか知らと思つたが、そうではない、極めて口に毒のありさうな奴が、女中をからかひながら乘り込んで來ました。こいつはいけねえと、急に狸をきめ込んでゐたのが、何かの拍子で咳を一つした、それを遂に道庵に感づかれてしまつたといふ事態になつてしまひましたのです。

飛び出して走る分には何でもない、逃げ走ることは商賣同樣だから、それは何でもないが、出ればすつかり網が張つてある、今飛び出してはあぶない、あれから、かうして、こゝに隱れてゐれば、もはや金城鐵壁、そこで此奴としては、久しぶりでのう〳〵と足腰を伸ばしてゐたところへ、又しても、此の邪魔者——布團の中で忌々しがつたが、結局狸をきめ通すより外はない、と觀念してゐるうちに、珍らしい、これはまた、江戸で見知りのある下谷の長者町の道庵先生だな、と氣がつくと、此の際、苦笑ひが鼻の先きまでこみ上げて來ました。

とは云へ、いかに道庵先生なりとはいへ、今日の此の場は自分にとつて、危急である、うつかりあの先生から、素性を口走られては事こはしだ——斯う考へたものだが、さて、道庵先生が、よせばいゝのに、わざ〳〵御腰を上げて、どうやらその屏風一重を引めくり

に來るらしいから、このまゝではいけないと、早くもその先手を打つたつもりで、がんりきの百が、急にうなり出しました、さも苦しさうに蒲團の中でうち呻り出したものですから、その聲を聞くと、道庵先生が急に我意を得たりとばかり

「そうら見ろ」

何が、そうら見ろだか、この言葉の分限がはつきりわからない、自分の勘が當つたといふ滿足か、或ひは、そうら見ろ、病人だ、醫者と病人は附きものだ、唸る位ならナゼ、もつと早く唸らない——といふほどの意味であつたか、その意味はよくわからないが、道庵は、荒つぽく引剝きもしかねまじき勢の屏風をそつと押して、のこ〳〵と此の中へ入つて來ました。

がんりきは、手拭を疊んで頭から額の方へ載せ、揉卷を頭までかぶらせて、カモフラを試み、さうしてさも苦しさうにうん〳〵と唸りつゞけてゐる。

「何だい、お前さん、病人なら病人と最初から云つてよこすがいゝぢやねえか、隱れ忍んでゐると、梁上の君子と間違へられらあな、どこが惡い、苦しいか、どこが苦しい、さア脈を見てあげる、手をお出し、腕をお出しよ、脈を見てあげるから、右の手を出して御覽——腕をお出しといふことさ」

道庵の押賣藝切——脈を見てやらうと、餘りある好意を此の病人が遠慮か謙遜か、腕を出さうともしない、押賣る以上はどこまでも强く押賣らなければならないと、道庵は相手が剛情なら、こつちもいよ〳〵剛情になるつむじ曲りを發揮して、

「出さねへか、拙者が脈を見てやるといふに、遠慮をして、腕を出さねへ病人も無えもんぢやねへか、いよ〳〵出さねへとなると……」

道庵は意地になつて、自分の手を夜具蒲團の中へつゝ込んで、忌應云はさず、この病人の腕を引ずり出して脈を見てやらうとしたが、

「おや〳〵」

あるべき筈の手ごたへが無かつたので、道庵が一方ならずテレてしまひました。

多景島の庵に行ひ濟ましてゐた辨信は、全く落つかない心で、安祥の座から立ち上りました。

「落つきません、竹生島へ渡らうとして、計らずもこの島へ寄せれたことも一つの御緣と存じまして、こゝで多少の修行を致して見るつもりでございましたが、この心が落つきません、つなげる駒、伏せる鼠でございます、この通り、四面水を以て孤絶されて居りながら、わが心を孤絶することが出來ないといふのが淺ましい事でございます、して見まするとと、此の地も到底修禪の處ではございませんと、處の幽閑が却つて魔緣を引くと覺えました」

例によつて、仔細らしく法然頭を振り立てゝ斯く云ひますと、庵の緣の柱の處に行つて柱の一方にからみついてゐる繩を解いて、それをスル〳〵と下へ向つて引きました。

さうすると、庵の一方に繩き足された一竿の竹の柱頭高く、へんぽんとして白旗が一つ現はれて、きら〳〵と朝日にうつり出したのです。蓋し、これは、かねて、米友が、この法師を此の島へ送りつけて置いて、立ち去る時にお互の間に示し合せて置いた合圖の一つで、その白旗を揭げた時は、即ち辨信が米友に向つて、何をか求むる希望の表示なのであります。次第によつては、金輪際と雖も、この座を動かないことになるかも知れないとまで思ひ立つた辨信が、僅か三日にして斯く白旗を揭げてしまひました。

白旗を揭げてから、辨信は、なほ緣の側を去らずに、仔細らしく小首を傾け通して居りましたが、暫くして、がつかりしたものゝやうに頭を上げ

「合圖は致しましたけれども、反應がございません、米友さんとのあの時の約束では、米友さんがこの白旗を見かけさへすれば、輕舸を飛ばして馳せつけて來ていたゞくことになつて居りましたのに……その反應が更らにございません、若し米友さんが伊吹へなり立歸つて、この白旗の見える限りの間に、お出でなさらない時の場合をも豫想して、あの邊の湖岸で釣を樂しんでおるでになる浪人衆によく〳〵お頼みがしてある筈になつてゐるのでございますが、その、どちらからも反應がございません、どなたも、私の投げた此の合圖に應じて下さるお人が無いとしたら、私はいかに落つかない心でも、やつぱり此の島が與へられたる當座の常住かも知れません、私は、もう一應、この處で坐り直さなければなり

ますまい」

と云つて、辨信は、またも、もとの席に歸つて正身の坐を構へて見ましたけれど、その

「且堰を切られたお喋りが、やむといふことをしません。

「坐り直して見ましたけれども、心の落つかないことは同じでございます。何か事が起りましたな、私をして、ぢつと此の坐に安んずる事を許さない外緣が、この周圍のうちの何れかの場處で起りましたな、わかりました。此の島は靜かなりと雖も、湖水の水が騷いでゐるからであります——山は動かないが、水が動いてゐるものですから、此の心が落つきません」

と云つて、折角、組直した正身の座ををほぐして、辨信法師はまた以前の緣側の方へ出て、今度は有らん限りの四周の湖面を、ずつと見廻しました。見廻したといつても、此の人は天性、肉眼の見えない人であることは申すまでもありません、四方の湖面に眼を注いだと言ひたいが、頭を注いで、さうして、今度は水に向つて物を言ひかけました。

「この通り、湖中の水が騷いでゐるものですから、それで、私の心が落つかないのです、

なぜ、斯うも湖水の水が騷いでゐるのかと考へますると……」

こゝでまた、小首を傾けて、懸崖遙か下の湖面へ耳をくつゝけて見るやうな形をしましたが、そのいふところは變つてゐます、事實、水が騷ぐ騷ぐと、辨信は口走つてゐるが、見渡すところ、今日は、此の靑天白日で、ほとんど風らしい風は吹いてゐない、竹島の竹も枝を鳴らさず、湖面全體の水面は至つて靜かで波風が騷がない、平和なものです、その平和な海に向つて、辨信は頗りに、水が騷ぐ、騷ぐと云つてゐる、平和な水こそいゝ面の皮で、事實、水が騷ぐのではない、彼の心が騷ぐのに定まつてゐる。

三五

斯うして、此の法師は水が騷がないのに我と我が心をさわがしてゐる、さうして、わがさわぐ心を以て、その罪を水に向つて被せてゐる——それのみではない、

「湖水の水が、斯くもあはたゞしく騷ぐのは……つまり湖岸が穩やかでないからです」

と、今度は、その責を岸へ向つてなすりつけにかゝりました。

「湖水の沿岸が穏かでないから、それで湖水の水が斯まで騒がなければなりません、水が悪いのではなく、岸が悪いのです」

わが心の動揺を美事に、沿岸へ向つてなすりつけてしまひました。湖面が青天白日の平和な光景である限り、沿岸だけが黒風白雨の天氣に支配されるといふ筈はない、然るに、此の小法師は、斯くも平和な湖面に向つて、騒擾の罪を着せると共に、今度は、その罪を沿岸に向つてなすりつけてしまつたが、波風の及ぶところは其處で止まるのではありません。

「先刻から、湖南湖北の巷の風説に聞きますと、此の沿岸の村々が事の外物騒がしいさうでございます、一味とゝうと申すのが、あちらにも、こちらにも、動揺の兆を見せてゐるさうでございます、私が通る辻々でも慥かにそのことを感得致しましたのは一再にとゞまりません、沿岸の人心が劇しく動揺を致してゐるその波動が此處に私の心をも動かしてやまないのでございます」

彼は此處で、立派に(?)わが心の動揺と群集心理の動揺とを結びつけてしまひました。

三六

辨信法師は、この小孤島のうちに寂靜を求めて寂靜を得ず、人を待たぬ筈の身が人を待つ心に焦燥を感ぜしめられてゐると、その日中の半ば頃から雨を催して來ました。

しめやかに降る雨は、却つて激しい風雲を豫想せしめないで、一層人の心を沈靜にする筈のものであるが、湖面一體に立てこめる雲霧の爲に合圖の白旗がいよ〳〵、合圖の効力を沒却するだけのことです。

辨信法師は觀念して夜に入りました、夜もすがら正坐を企てゝゐるうちに、雨は、漸くしと〳〵と多きを加へやうとも、降りやむ氣色はありません、夜雨の軒をめぐる音を聞くと、辨信法師の心がまた、いとゞ潤うて來ました。いつの世か、夜雨禪師といふ人があつて、事の外夜の雨を聞くことを樂しんだといふことだが、全く、靜かな心境で、夜の雨が軒をめぐつて心耳を潤ほす快味は得も云はれない、處が、その夜更けの幾時かになると、庵の表の戸を

「トン〳〵」

と叩く音がしました。此の庵の表の戸といつても、戸らしい戸があるわけではありませんが、それでも以前、住みならした人の建てつけだけはしてあつたのを、辨信法師は此の際雨戸といふ名の實めを寒がせる爲に、使用して居りましたものです。

「どなたでございますか」、

と、夜の雨を樂しんで、動搖の心を濕ほしてゐた辨信法師が、我に歸つて、夢心地で返事をしますと、

「辨信さん、居りますか」

と餘り聞きなれぬ人の聲です。

「はい、辨信は居りますが、あなた樣はどなた樣でゐらつしやいますか」

「ちよつと、頼みがあつて參りましたよ、開けてもようございますか」

「どうぞ、開けてお入り下さい」

思ひがけない來客は立つけの雨戸を外して見ると、簑笠をつけて、提灯をその簑の中へ

包んでゐたのが、靜かにその光を庵の中へ向けて

「ちと頼みたいことがありましてね、夜分突然にあがりましたよ」

思ひがけない人が、突然にやつて來て先方から頼みたいことがある、頼みたいことがあると云つて繰り返す——頼みたいことではない、頼まれたいことは寧ろこちらにあるのです、と辨信に云はせない先に、その人は

「三人連れでやつて來ました」

「お三人でお出でになりましたか」

「えゝ、三人でやつて來ました、まあごめんなさいよ、いゝですか。皆んなこの中へ呼び入れますよ」

「どうぞ」

「どうも、不意に押しかけて相濟みません……」

つゞいて、外に待つてゐたらしい二人の簑笠が決して廣くもあらぬこの庵の中へと、亂入ではない、侵入でもない、極めて靜かに全く世を忍ぶ者でもあるやうに、笠のまゝで

入つて來まして、土間に突立ちました、提灯は一つ最初の簾の間に隱されてゐるだけですから、後ろを照らすことは少なく、前を照らすことのみに向いてゐるが、本來は辨信法師のゐるところに限つては、夜晝共に光といふものが用を爲さない、だが、この場面の全體をたゞ一本の蠟燭に任せては、照明の任が重過ぎる、その時、漸く辨信法師が、最初當然こちらから爲すべき質問を不意の來客に向つて切り出しました。

「あなた方は、わたくしが揭げました合圖の旗を御覽になつて、それによつて、お出で下すつたのではございませんか」

これは當然の質問です、當然の質問といふよりも、先方からのつけに切り出さねばならぬ處の挨拶であるべきであつたのです、つまり

「辨信さん、遲くなつて濟みません、つひ、あなたの合圖の旗を認めるのが遲かつたものですから――いや認めるには認めましたけれども、これ〳〵、しか〳〵の事情にさまたげられて後れました、隨分心配したでせう、もう安心なさいよ」

とでも云つてくれるのが本筋であるべきのに、その事は云はずして、一圖に自分の方の

勝手でやつて來たやうな事を云ふものですから、辨信から逆にダメを押されたのです。さうすると、その返事が、

「いや、一向さういふことには氣がつきませんでした――」

三七

「はて」

ところで、辨信が、はじめて法然頭をひねり立てました。

今まで、彼は、夜雨を聞くことによつて、本來の鋭敏なアンテナを張ることを忘れて居りました。

忘我の瞬間には、勘だの、想像だのといふものは働らきません、こゝで、我が破れて、意外の相手と、意外の問答をやり出してから、辨信が急に、アンテナを張つて、自分の特有の機能の働らきを逞しうせんとするまでもなく、先方が、何のわだかまりもなく、說明の大ぎ足をして行くのです。

「あなたの方の合圖には一向氣がつきませんでしたが、こちらが、早くお前さんのことを思ひ出したものですから、一圖に頼みに來たのです、頼みに來たといふのは外ではありません、こゝへ暫く人間を一人預つて貰ひたいのです、單にあづかるだけではなく、かくまつて置いてもらひたいのです。その頼みの爲に、夜分、斯うして三人連れで上りました」

最初の簑笠が、こゝで頼みたいこと、頼みたいことゝ繰返した内容を明かにしはじめました。辨信はそれに答へて

「お易い御用でございます、もとより、この住居は先人の住み捨てた庵でございまして、私一人が專有を致すべき筋合のものではございませんから、御用と内容が許す限り、何人でもおいで下されて一向さし支へはございませんが唯特にこの離れ島まで、この夜更けにわたくしを目ざして、お出で下さるのが不思議でございます」

「いや、不思議でも何でもないのです、日中ではあぶないと思ふから、夜分上つたまでの事です、辨信さん、それでは當分こちらへ人間を一人預つて下さい」

「御念までには及びません、わたくしは依頼されてお預り申すほどの器ではございませんが、御依頼を御辭退致すほどの不人情も致したくはございません。一體こゝにおいでになりたいといふのはどなたですか」

「農奴です、農奴を一人預つて貰ひたいのです」

「のうどとおつしやるのは」

「農奴――農民の奴隷です」

「農民の奴隷――さういふものが、此の日の本の國にございましたかしら」

「いや、さう理窟をおつしやられると困ります、さういふ人種が日本の歴史に在つたか無かつたかといふことの詮議は後日に讓つていたゞいて、兎に角、ある方面で農奴の名を冠せてくれた、それをそのまゝ借用して置いて、不取敢、農奴として、あなたにお預けしますから農奴として暫らくお預かりが願ひたい」

「宜しうございます、わたくしは決してどなた、こなたと撰り好を致みすやうな器ではございません」

「どうも有難う、ではこゝへ農奴を連れ込みます」

と云つて、先きに立つたのが簑にくるんでゐた提灯を心持ち外の方に向け直しますと、あとから來た簑笠が心得て、雨戸の外へ、そつと身を忍ばせて行きました、その途端に、さゝやかな光が二人の簑笠の外面を照しますと、二人共意外には、簑笠から外へ二つの長いものがハミ出して居りました、こゝに於て見ると、二人共に兩刀を帶してゐる身分のものだといふことがわかりました、一人が内で待つてゐると、外へ飛んで行つた一人が、岩角の凹みのところまで來て

「農奴――ゐるか」

と忍びやかに音なうと、答へはなかつたが、岩の凹みからまた一つの簑笠が現はれ出して來ました。しかも、今度の簑笠は前のより一段と小さい、いや簑笠が小さいのではない簑笠は通常の出來だが、内容が小さい爲に、尋常の行丈だけの、簑笠が地上に引ずられてゐるだけの相違で、以て身の丈の低い、子供にも見まほしき人物の一塊であることがわかります。

「農奴――こつちへ來い」

迎へに來た簑笠が、迎へられた小さな簑笠の一塊を引具して、さうして、以前の庵の中へと戻つて來ました。その途端に辨信の勸がうなり出して

「はゝあ、わかりました、あなた方は、わたくしの友人を連れてお出で下さいました、わたしの友人を友人としてお連れ下さらずに、農奴としてお連れ下された、それには深い仔細がございませう、よつて、わたくしは、それを友人として受取らずに、農奴としてお受取いたします」

何といふ小賢かしい云ひぶりだらう、二箇の簑笠は顔を見合せてしまひました。

三八

その翌日も亦、打ちつゞいての雨でありました。

農奴としての宇治山田の米友はと見れば、庵の後方なる穴藏の中に、菰を打ち布いて、高鼾で寢て居ります。

あれより以後の米友といふものは、何故か一語も吐きません、常ならば慷慨悲憤が口を

衝いて出るか、成は痛快無比なる喚呵が泡を飛ばして迸るかしなければならない場合を、あれから全く一語無しです、意氣が銷沈しつくしたか、或ひは、また、もう天下の事、云ふがものも語るがものも無い！と斷念したのか、とにかく、彼は、もう一語をも發することなく、それでも、多少の疲勞はありと見えて、この穴藏に移されると共に、前後も知らず寢込んだまゝです。

斯くて庵の一室には、雨の日のつれ〴〵を假りの宿りの主としての辨信法師とは別に、二人の者が各々の兩刀をからげて投げ出し、丸木の柱によりかゝつてゐる、その二人の者こそは、必ずや、昨夜、不意に霄づれた簑笠のものであるが、果して、どんな面が來たのかと明るい光で始めてうかゞつて見ると、この二人も別に珍らしい面ではありませんでした、卽ち昨日までは伊吹御殿に見えた不破の關守氏と、智善院に詫住居の靑嵐居士と二人が、こゝで拔からぬ面を合せてゐるといふだけのものです。

さては、昨夜の簑笠は、この二人の者であつたよな、但し何ほどのこともない、ひとしくこれ、湖水湖岸に程遠からぬ處に住んでゐる自由遊民である、それが、同じく程遠くもあらぬ湖中の一島へ來て、面を合せるといふことは、有るべからざるに似た奇遇でも何でもない、斯うして見ると二人も、伊吹御殿で語り合せた時の面と、別段外行（そゆき）の面にはなつてゐない、あの時の呼吸で悠々と調子を合せてゐる、不破の關守氏が先づいふことには

「そも〳〵日本に於ては、兵と農とは二つの種の二つの民族ではない、一つの物の二つの變形に過ぎなかつたのです、それが、歷史の本筋でした」

「さうでせう——さむらひといふ言葉は本來、いつの頃から起つた言葉か知らないが、少くとも鎌倉幕府以前には、特にさむらひといふ遊民は無かつたやうです」

「さ樣——事ある時は、兵は皆農より取つたものです、事ある時には兵となり、事無き時には農となる、それだけのものでしたね、その時代は」

「さうですとも、三浦、和田、畠山なんぞといふと、素晴らしい大名かなんぞのやうに聞えますが、今日の諸侯と比べたら大違ひ、實は皆從等はその土地々々に據つた大百姓に過ぎなかつたです」

「さ樣、その大百姓が、それ〴〵家の子郎黨を地割のうちに置いて一緒に百姓をしてゐた

のですな、處で、天下を取らうとする者は、それ〴〵この大百姓共に渡りをつけると、その時の風の向加減によつて、三浦、和田、畠山といつたやうな大百姓が、或ひは源氏、或ひは平家と、味方に馳せ參じて、天下を取らせたり取らせなかつたりしてやる、天下を取らせたり取らせなかつたりしてやつた後は、また郷に歸つて百姓をする――と云つたのがあの時代の武家の制度でした」

「その通り――それが、現在のやうにかつきりと武士と百姓が別れてしまつたのは、大なる不祥といへば大なる不祥でした」

「そも〳〵、今日のやうにさむらひと百姓とが、かつきりと別れてしまつたのは萩生徂徠の說によると、北條時賴の時代からださうです」

「北條時賴から初まつたと、さう明確に線を引いてしまふわけにも行くまいが、いづれは鎌倉の中期頃天下に漸く事が多くなつて、屯田の農民ばかりではやりきれない、どうしても常備兵といふものゝ必要に迫られて來た時から初まつたのでせう、斯くて、世が亂れるにつれて兵の需要が增し、同時にこれを司るものゝ威力が增大して來ました、兵が勇敢となり、威力が加はつて來て見ると、悍然として身命を賭して外敵に當るものゝ風采が頗爽として勇ましく見える、土にかじりついて耕作をする人間の姿が、いたましくも見すぼらしくも見え出して來る、そこで武士は選ばれたる優越階級となり、農民は落伍せる下積階級のやうに見え出して來て、やがて最も鮮かに兵農が分離してしまひました」

「兵は農より出でて農を輕んじ、農は兵を出して兵を恨むの事態が醸し出されたのは不幸です」

「御尤もです、古へは兵が農を守りました、今は兵が盡く「さむらひ」といふ遊民になりました、此遊民を威張らせ、養つて行く爲に農が十重廿重の負擔をしなければならないさむらひといふ遊民を食はせて、これに傲慢と驕奢を提供する役廻りが農民の上に負はされて來たといふ次第です」

三九

「まづさうです、例を德川氏にとつて見ませう、德川家が所謂旗本八萬騎を養成した當時

には養成すべき理由がありました。その所謂、八萬騎によつて海内を平定して、三百年來の泰平を開いたのです」

「さ樣――それは認めなければならない、同時に、德川家に對してのみ承認すべきではない、三百諸侯が、大小となく、皆、それ〳〵相當の士を養つて、各々の領土を安泰にしそのまゝ德川家にぶら下つて、三百年の泰平が出來上りましたには相違ないが、さて、その後は武力の必要が無くなつたのです凡そこの世に必要なきに存在する人間は皆遊民です、非常時に當つては最も有用なりしさむらひが、常時に於ては無用の遊民と化してしまつた德川家八萬騎をはじめ、三百諸侯が各々莫大な遊民を抱へ込んでしまつた、而して、その食糧並びに遊民の遊蕩費といふものを、何れに向つて求めませう、百姓――農民より搾る外に出所はないではないですか」

「全くその通り、我々も昨日までは、その遊民の端くれの地位を汚してゐて、農民の血汗に寄食してゐたものです、戰國の時代を程遠からず、武士の威力と恩惠がまだ存してゐた時代は格別、かうして永く泰平が續く間に、平和に働らいてゐた農民が、我々こそは何故に斯くまで働らきつゝ斯うまで搾られなければならないか――そこに疑問を持ち憤慨を持ち、反抗を持ち來るのも亦歷史の一過程でせう」

「近代に於て、百姓一揆といふものが澎湃たる一大勢力となり、牧民者がほとんど手のつけやうがなく、しかも表面は相當の刑罰を以て臨むにかゝはらず、事實は、いつも一歩一歩と一揆側の勝利の結果となつて行く、それも、あながち筋道が無いとは云へないです」

「併し――當世の事はさむらひと百姓、つまり兵農の分離といふことの外に癌はないかと云ふと、事はさ樣に單純なものではないのですな、兵と農との外に、つまりさむらひと百姓との外に、別に一つの大きな勢力が現はれました、その現はれた大きな勢力が、兵をも食ひ、農をも食ひ、見る見るうちに食ひ肥つて、有ゆるものを食ひ盡して舌なめずりをしやうとする惡魔の出現を見ないわけには行かないでせう、その大きな新勢力といふのは、卽ち町人です、百姓がさむらひに對して、頭を上げて來たといふよりは、いづれは百姓もさむらひもやがて、此の町人と云ふ新たな化物（ばけもの）の爲に食はれてしまうやうな時代が到來するのでは無いか――拙者は以前から、多少、それを懸念してゐたが、この江州に來ていよ

〳〵確實にその將來の懼るべき黑影を見て取ることが出來ました、如何です、この町人といふものゝ今日の時代に於ける隱約なる大きな力を御覽になりましたか」

「成程」

新興町人勢力の怖るべき事を先づ說き出したのは靑嵐居士で、それに深くも合槌を打つたのは不破の關守氏でありました。

「江州へ來て、江州商人の勤勉ぶりを實見し、その江戸大阪へ及ぼすところの勢力を深く觀察して見ると由々しきものは、この町人勢力です。農民をいぢめることにかけては虎の如く勇敢である、さむらひ階級が、この町人階級に向つて頭の上らないことは一日の故ではありません、富の前には武家の威力は憐れむべきほど貧弱であり、卑屈であるのです、その實例として……」

「いや、その邊は、拙者も大阪に少々住居をいたした事がござる故に、多少の知識をもつてゐるつもりです、蒲生君平も申しましたよ、「大阪の豪商一たび怒れば天下の諸侯皆慄へ上がる」と蒲生君平も單なる尊王愛國の放浪狂ではありません、なか〳〵裏面に徹して見る慮はよく見てゐますな」

「さうです、我々は、この兵と農との爭ひは、本來これは親子なんですから、それは存外早く解決すると見てゐますよ、ひとり、町人階級のものに至つては、これは全く性質が違ひます、彼等は兵を動かす度に儲けます、農が汗水垂らして生產したものを、引くるめて算盤一つで横領してしまひます、農と兵とは親子關係ですが、商に至つては、この兩方の血を吸ひ骨を削ることによつて、身豪を肥やして行くといふ種族なのです、その點にかけて大阪商人の魔力眞に怖るべきです」

「大諸侯が大阪町人の有力者に頭が上らない、大諸侯の家老が大阪町人を上座に据えてその前に平身低頭して借金を申入れる——その醜劣なる光景を拙者も目のあたり實見いたして居りますよ」

四十

「實は我々も、前に申した通り昨日までは、農民に食はせてもらつた遊民の一人で居なが

ら百姓を輕蔑する習慣の下に教育されて來てゐたのですけれども、事實、百姓の難儀を見ると同情の念が起り、一揆の勃發があるにしてからが、憎まうとして憎めない場合が度々なのです、然るに町人の横暴に至つては……」

「全く同情が出來ません、容捨がなり兼ねるのです、表面は免に角、實際に至ると、今は兵も農も共に苦しみつゝあるのです、農民の苦しみは、現實的に見てゐられないほどですが、さむらひの方も德川家をはじめ大小諸侯の內輪が皆火の車です、慘憺たるものです、然るに商に至つては……彼等は血を以つて天下の泰平を保證したといふ歷史を持たない、身を以て苦勞して衣食を供するといふ奉仕もしない、その間の糟を取ることによつて、すべての富を蓄積し、その富の威力で、兵をも農をも支配せんとする、仁義道德がすべて錢によつて支配されんとする時代がやがて來るのです、否、すでに來つゝあるのです」

「お話を伺つて居りますうちに、わたくしは大へん悲しくなりました」

そこへ、拔からぬ面で、突然に口をさしはさんだのは辨信法師でありました。

談論酣なる兩浪人は、この差出口に痛く驚かされました。今まで全然存在を認めてゐな

かつたわけではないが、談論の相手としては眼中に入れて置かなかつた人の突然の發言ですから、二人は特に驚かされたのでした。取り上げることをしなかつた第三者が、此處に至つて、さも心得顏に差出口を挿んだことによつて、この席にこんな小法師が侍べつてゐたのかといふことに氣がつき、改めて見直すと今までの二人の會話を、最も熟心忠實に傾聽してゐたことを思はせる存在ぶりでありましたから、二たび三たび驚異の感に打たれざるを得ませんでした。同時にまた、「油斷がならぬ」というやふな警戒心も此の時に、頭をもたげたやうです。本來、この二人は此處に存在せしめられてゐる盲小法師なるものに就て、何等特別の豫備知識を與へられてはゐなかつたのです、こゝへ伴ひ來つた前晒らし者のグロテスクによつて、此の島に斯かる人物が存在することを知り、これこそ、しばしの身を托するに安全の處と心づいただけの發起でこゝまで、伴ひ來つたものでせう、この小法師が、變つた修行者であるといふことだけの默會はあつたものでせう、併し、その外には、何等の豫備知識がない上に、右にいふやうな漠然たる先入感から凡そ浮世のこととはかけ離れた修行者であり、しかも充分に不具者の資格を備へた存在物を、此の孤島の中で

前に置いての談論ですから、言論は絶體的に自由であることを安心しきつて、談論が縱横に酣なるに任かせて行く途中、こゝで、拔からぬ面で、差出口をされたものですから、驚くのも無理はありません、もし、この二人に多少なりとも豫備知識があつて、此處に存在する小物體が、怖るべき感覺の所有者であり、また更に怖るべき饒舌家であることを知つたならば、二人共、斯くまで破目を外して、時事を痛論するやうな事は無かつたでせう、もしありとしても、必ずや、この小存在物を豫め眼中に置いて、談論の一節一節の終りと初めとには、

「わたし達は、かう思ふが、辨信さんはどう思ひます」

と一口ぐらひは挨拶があり、會釋があつて然るべき筈だつたでせう、それをさうしなかつたことを悔ゆるまでもなく、二人はたゞ驚きの上に呆れて

「辨信さん、何が悲しいのだ」

とダメを押したに過ぎません。

「何が悲しいとおつしやいましても、人間が人間同志理解し合へぬほど悲しいことはございません」

「エ、エ、何ですつて」

と二人は、また驚異と疑惑とを以て、辨信法師の面を見直しました。

「人間が人間を理解し合へぬほど、悲しいことはございません、人間が人間同志理解し合へなければこそ、人間の團體が、おの〳〵その團體を理解することが出來ないのでございます、さむらひが、お百姓を理解することが出來ないのが悲しいです。お百姓がさむらひを理解することの出來ないのも悲しいです、士農は工商を理解することが出來ず、工商は士農を理解することが出來ないといたしましたならば、四海のうち、四民の間、何處に共存共榮の地がございませう……」

さてこそ、怖るべき饒舌が、これから初まるらしい。

四　一

一息にこれだけのいとを云ひ切られて、さしも二人の浪人が、

「うーん」

と唸りました、併し、實はまだ唸るのには早かつたのです、この邊で唸り出してしまつた日には、この小坊主の底の知れないお喋りの腹藏のやつと戸口の處へ來て、眼を廻してしまつたやうなものなのです、前に云ふ通り、皆目お喋り坊主のお喋りぶりの如何に怖るべきかといふ事に、豫備知識を持たなかつた二人としては、先づ此の邊で驚いてしまふのも無理のないものがあります、一方辨信法師に於ては、こゝで漸く持病の堰を切つて、辯論の瀧を放流しはじめました。

「たとへばです、あなた方は、農が苦しいといふ立場だけは十分御理解になつてゐらつしやるやうですが、農が正しいといふこと、農が樂しいといふことには、未だ全く御理解が無いやうでございます、この世の中に存在するいろ〳〵の仕事のうちで、農が一ばん正しい職業でございます、がう申しますると、他の有ゆる職業は皆正しからざる仕事かとお尋ねになるかも知れませんが、左樣ではございません、先づ原始的といふ意味で申上げますると、第一、何物よりも農が正しい仕事なのでございます、農は天下の大本と、仰せになりました通り、百姓こそは、土を母として、その惠みの上に　作物を育てゝ人間を養ふ仕事でございますから、先づ以て、人間の仕事で、これより最初のこれより正しい仕事は無いと云つてもよろしうございます、正しい仕事は自然貴まれなければならないのです、自然、農といふものが、最も正しい仕事でございますから、當然最も貴い仕事だといふことになるのでございます……まあ、お待ち下さい、あなた方は、ならばその貴い仕事が、ナゼ、今日のやうに貴ばれない、貴ばれないのみではない、ナゼ、今日のやうに卑しまれてゐる——と御反問にならうとしてゐらつしやる、まことに一應御無理のない御反問でございますが、貴ばるべき仕事が貴ばれざるに至りましたのを、あなた方は、搾取する者の責にのみ御覽になるやうでございますが、成る程、それも一應の見方には相違ございません、惡い地主なり、惡い代官なりが存在いたしまして、罪もない、おとなしい百姓を苛めさいなんで之を搾り、之を使ひ、これを奴隷以下におとしめるといつた現象を、私共もしらないといふのではございません、そこは、あなた方の御論據に十分の理解を持つてゐるつもりでございますが、その責を單に、それだけに歸して、他を怨むことばかりを敎へる

のは宜しくございません、それは片手落といふもので、さういふ方面ばかりを教へて、地主が悪い、代官が憎いといふ、治者に對する被治者の反抗心だけを教へるやうな論理はいけないと思ひます、さうして得るところのものは何かと申しますと、それは必ず得るところのものより失うところが多いものでございます、百姓一揆といふものに拂はれました大きな犠牲を蹴つて、お百姓達自身の正しい立場を自覚させることに盡しましたならば……いや、あなた方は、それでも御不満でゐらつしやる、生活が切羽詰つてゐるものに、正しい自覚の何のと、そんな緩漫な沙汰ではない、とかう考へてゐらつしやると存じますが、それを、もう一歩進んで考へていたゞき度うございます。私とても現在の農民生活がこれで宜しい、これでお前達には十分だ、これより生き過ぎてはお前達の分に過ぎると申したくはございません、どうかして、もう少しお百姓の生活を樂にして上げたいものだと思はないことはございませんが、それより先きに教へて上げていたゞきたいことは、苦しいだけが農民のつとめではない、只今、私も申しました通り、百姓ほど正しい仕事はない、百姓ほど貴い仕事はない——といふことの觀念を昔に戻して、農民たちによく〳〵悟らせ

ることが急務ではないかと考へてゐるのでございます、さあ〳〵また、あなた方は、なあに盲法師の小坊主が途方もない減らず口、自分の立場を苦しくないと考へやうにも、貴いと考へさせやうにも、現在この通り苦しい、この通り卑しめられてゐる、現在それを頭だけ引離して、考へて見ること、考へさせて見ることが、どうして出來る——と斯樣におさげすみになつてゐらつしやるでございませうが、そこが、私の頭の違ふところでございまして、とにかく、一應お聞取りを願ひたいのでございます」

四　二

辨信法師は、引つゞき滔々と喋りまくりました。

「これは、ひとり農民に限つたことはございません、すべての人に傳へなければならぬ觀念なのでございますが、殊に農民から始めて、誤まつた貴賤貧富の觀念をすつかり改めてやらなければなりません、貴賤貧富の觀念を改めると申しても、惡平等に墮せよと教へるのではございません、君は君とし、親は親とし、人倫は各々尊重し合なければなりませ

ん、それは古へよりの道でございます、その正しい倫理觀念に反逆をそゝるやうな教へ方はいけません、中世以降この世界をすべて麻痺せしめてしまつて居りますところの貴賤上下の觀念だけはすつかり取拂つてやつて、萬事はそれからの事なんでございます、後代の貴賤上下の觀念は、人間本質の輝きではございませんで、その輝きを沒却するところの手段方法に供せられた點が夥しいのでございます、その爲に、世界の見て以て卑しとするものが必ずしも卑しからず、俗界の見て以て貴しとすることが、必ずしも貴とからず、貧が必ずしも辛からず、富が必ずしも樂ではないといふことの根本の事實と實際とを教へて上げなければなりますまい、末世に於きましては、事實上、正當の地位が皆置き換えられてしまつてゐるのでございます、それは最初のうちに國を治める人が方便の爲にした事が後日はその方便が方便の假借から離れて、その事そのものに我とつけてしまつた箔の爲に我と迷ふてゐるのでございます、たとへば、この世の位階勳等の如きは最初は、帝王の宏大なる政治心から人間待遇の道として開かれたものでございまして、人が偉いからおのづから、そのかゞやきが發せられたものなんでございますが、後代に到りますと、人間がつ

まらないのに箔だけがかゞやくものでございますから、智慧の淺い多數の者がその中味を見ないで箔だけを拜むやうになりました。位階勳等ばかりではございません、人間の原始の生活には富といふものはございませんでした、また、正當な生活をやつて居りさへ致しますと、富といふものゝ蓄積も使用も、さのみ効用が無いものなのでございます、然るに末世になりまして、人間が各生活の爲に戰ふやうになりますと、富の蓄積が卽ち生命の蓄積と同じやうな貴重なものになりまして、同時に人間そのものゝ生命を尊重するよりは生命の爲に蓄積した富そのものを拜むやうに間違つて參りました。富があれば安樂にして一生が暮せる、富が無ければ一生を牛馬の如く苦勞して暮らさなければならぬ、一歩あやまてば餓えて死なゝければならぬ、その恐怖の爲に萬人がおのゝいて、みす〳〵罪に落ちて居りますが、私から云はせますと、この位違つた迷信は無いものと存じまする、他人の膏血による富を積んで、己が安樂に暮さんとする、その安樂が世の人の考へる如く安樂なものでございませうか、汗を流して終日働らく人達のみが、世の人の考へるほど不幸なものであり、勞苦なものでございませうか、この觀念を今の人はよく見直すことに出直さなけ

ればならないのではないですか、位階勲等の高きもの、身分格式の卑しいもの、働らかないものが幸福で、働らくものが不仕合せ、たゞ單にそれだけで或ひは誇り或ひは憂へるといふことがあんまり淺はかに過ぎます、本當の幸福は、世の所謂見て以て高しとする處になく、見て以て低しとする處に存在するのではございますまいか、且又、本當の安樂は、世の見て以て逸とするところに存在せずして、見て以て勞とするところに存在するのではございますまいか、御存知でございませう、佐藤一角先生が大公望をお詠みになつた詩の中に「一竿ノ風月心ト遠フ」といふ句がございます、その前句は多分「誤マッテ文王ニ戲セ得テ歸ラル」とかございました。私の記憶と解釋が誤つて居りましたらば御免下さいませ、あれは大公望が、釣をしてゐる處を周の武王に見出されて天下の宰相となりました、普通の眼で見ますると、これより以上の出世は無いのでございまして、世間の光榮と羨望の頂上でございますが、大公望御自身から申しますると、大へんにこれは間違つてゐる、自分の本當の樂しみは一竿の風月にあつて、天下の宰相になることではない、それを見出されてしまつたのは時の不祥である、といふ心持をさすがに佐藤一角先生がお詠みになり

ました、それは負け惜しみでも似非風流でもございません、大公望樣、それ自身の本心なのでございます、樂しめば一竿の風月の中に不盡の樂しみがある、それより外の物は結局煩ひに過ぎない、といふ大公望の心境を、さすがに佐藤一齋先生がお詠みになりました、それから、また三國の時代の有名な諸葛孔明でございますが、御承知の通り、諸葛孔明樣の有名な出師の表の中に、臣モト布衣、躬ラ南陽ニ耕シ、苟モ生命ヲ亂世ニ全フシテ聞達ヲ諸侯ニ求メズ　といふの句がございます、聞達を諸侯に求めずといふ、この求めざるの心が敢て諸侯に向つて求めざる所以に限つたものではございません、何者に對しましても求めざるの心があつて、はじめて心が亂れませぬ、心が亂れませぬ故に、いつも平和でございます、何物が參りましても之に加へることが出來ませんし、またこれに減ずることも出來ないのでございます、古語に「自ラ求メザルモノニ向ッテハ哀樂ソノ前ニ施スベカラズ」といふのがございます、世に此の求めざるの心ほど強いものはございません、諸葛孔明は最初から此の最も強い地位に座しておゐでになりました、その求めざるの心が安定いたして居りましたのは、それだけ修養が積んで居りましたのですが、一方から物質的に見

て見まする と、あの躬ラ南陽ニ耕シと仰せられた通り、諸葛孔明は自分で百姓をしておいでになりましたから、それで生活の分が足りてお出でになりました。百姓を致して天地から生活の資料を直接に惠まれておるでになりましたから、生活の爲に何物を以つて加へられても決して動搖を致しませぬ、諸葛孔明樣は古今の名宰相でございますが、百姓として立派なお百姓でございました、諸葛孔明は蜀の玄德の爲に立たれるまでは南陽と云ふ所で躬ら鋤鍬を取つて百姓をしてお出になりましたのです、どの位の石高のお百姓でしたか私にはよく解りませんが、出廬以前のお百姓と致しましては、恐らくやつと食べて行かれる丈の水呑百姓の程度を遠く出でなかつた百姓であつたらう事を想像致されるのでございます、孔明は幼にして父母を失はれ、相當に苦勞をなされたさうでございますから、さう大した資產が殘されて居りましたとも覺えません、少くとも農奴を使用して自分が手をふところにして居る地主樣ではございませんでした、躬らたがやして働らくところの一農夫でありましたに相違ございません、「躬ラ南陽ニ耕シ」とある、躬耕の文字がその事實を證明いたします、後に蜀の丞相の位に登りましてから上表の文章の中に、「自分には成都に桑八

百株薄田十五頃があるから子孫の生活には困らせない用意は出來て居り、官から一物をも與へられなくとも生活が保證されて居りまする」と云ふ事が書いてございます、桑八百株と申しますと一坪に二株づゝとしましても約四百坪の地面に過ぎません、薄田十五頃と申しますと日本のどの位の面積に當りまするでございませうか、佐久間象山先生は日本の五百石位だと仰せになりましたが、或人に伺ひますと、一頃は田百畝の事ださうでございます、その一畝と云ふのが日本の一畝と同じ事でございますかどうか、日本の一畝は當今では三十坪と云ふことになつて居りますが、支那の一畝は百坪或は二百四十坪だと云ふ說を承つた事もございますが何に致せ蜀の時代と致しますると、今から千七八百年もの昔でございますから、私共にはとうてい本當のところは解りません、依つて之をどこまでも日本面積として考へて見ますると、一頃百畝即ち十五頃は千五百畝となる譯で御座います、其千五百畝を日本式の坪數に引直して見ますると四萬五千坪でございます、之に前の桑田四百坪を加へますと、四萬五千四百坪になる勘定でございます、其の四萬五千四百坪を今度は日本の反歩に逆算して見ますると一反歩を三百坪と致しまして、三千坪の一町歩、三萬坪

の十町歩、後の一萬五千坪を反歩に引き直しますると三五の十五で五町歩、さう致しますると四萬五千坪は卽ち十五町それに四百坪を加へますると十六町三畝十歩の土地を諸葛孔明樣は持つておゐでになりました、十六町歩と申まするとと日本の國では先づ中農以上の大地主の部類に屬する地面持でございますが、かりに之を一反歩五俵二石取りと致しますと一町歩の二十石十町歩の二百石、五町歩の百石でございますから、三百石取の資產なので御座います、三百石取と申しますと、日本の侍の中通の身上に過ぎないので御座います、二千年近くの昔とは申せ、四百餘州の支那の國を三分した天下の宰相が三百石取の知行で甘んずることを心得て居られたと云ふ事によつて、如何に諸葛孔明が淸廉潔白のお方であつたかと云ふ事がよく解るのでございます、それで御自分丈ではない、一家一門を不足を云はせない樣にしつけて置かれたのですから、いざとなれば自分も宰相の位をやめて鍬を取つてお百姓になれる丈の腕をお持ちになり、それから又御子息達をも地主樣としてゞなくほんとうに自ら働くお百姓として立つて行かれる樣に敎育を爲されてお置きになつたものに相違ございません、假にまた只今數へて見ました孔明樣の御知行を支那面積に見つもりまして三倍、四倍と評價を致して見ましたところで、千石前後でありまして、日本で申しますと、中藩の家老どころに過ぎないので御座います、諸葛孔明は支那三千年、第一等の宰相と稱せられて居りますが、お百姓としても又立派な一人前のお百姓でありました、その力でございます、でございますから、まだ出廬をなさらない時分の每日の生活と申しますのは、晴れた日には、自分から陽當りのいゝ前畑に出て躬耕を致し、雨の日には自分の好むところの古今東西の書物を取つて御覽になる、それだけの境涯で樂しみが餘りあつてそれ以上には全く求むるの心がございませんでした、求めなくともよろしいのです、それ以上求める必要もございません、求むれば却つて煩ひを惹くといふことを、明白に御自覺でございました、王者の身を屈して、その人の草廬を三たびたづねられても、出づることを欲しなかつたのは、大臣大將の身になるよりも、此の五段百姓の方がどの位御當人に好ましい境遇であることをつくゞ〳〵自ら味つて居りましたのです、お百姓といふ仕事は全く天の時と、地の惠みだけで生きられる仕事なのでございます、亂世ともなれば、此の世界はまだ廣いのでございますから、未開墾の地も到るところにございませう、兵馬の到らな

い、戰塵の飛ばない、平和な地に根を卸ろしてそこに耕して生きて行く分には、何人の權力もこれに及ぶことはございますまい、諸葛孔明は農業を樂しむことを知る人でございました。斯樣に申しますると人は皆諸葛孔明ではない、しかしこれを樂しみ得られる人ばかりではない、とおつしやるかもしれませんが、この農を樂しむ心は、移して以て如何なる人の境涯にも置けないことはございませぬ、私のやうな人にも神にも見放されました不具の身は格別と致しまして、凡そ五體が滿足でありさへ致せば、如何なる人も農を樂しんで樂しめない筈はないのでございます、他の樂しみは、各々、その天分氣分にもよりませうけれども、農ばかりは誰も之を働らき、誰も之を樂しんで、さうして自他共に、他に迷惑をかけることの微塵もない職業なのでございます。農業の苦痛を說くのも、時にとつては當然の應病與藥でございますが、諸葛孔明の心を以て農を樂しむことを萬人に敎へて惡いといふことはございますまい……と私は考へますのでございます」

「うーん」

さすがの不破の關守氏と青嵐居士がこゝに至つて全く唸つてしまひました、やつとわづかに一聲唸るだけの閑隙を與へられました。

四　三

云はせて置けば、まあ、どの位喋べるのか、大公望から始まつて諸葛孔明が出て來たかと思ふと支那と日本の段歩の換算まではじめられてしまつた。あまりのことに、口を挿まうにもさしはさむ隙間が與へられない、啞然として空しくこのおしやべり坊主の面をながめてゐるばかりでしたが、こゝに至つて、漸く

「うーん」

と一つ唸るだけの隙を與へられました、併し、ほんの一つ息つぎに唸る隙を與へられただけでお喋べり坊主は彼等に二の息を次がせませんでした。

「之を樂しむことを知れば、もはや苦しみの來る隙は無いものです、私が關東の方を旅をして居りますうちに、到る處で、二宮尊德先生の報德の仕法を承りました。相模の國の二宮金次郎といふお方でございます、あの方は幼少の折柄お代官にはいおめられませんでし

たけれども、天然自然の爲にいぢめられました。いかに惡いお代官でも田地田畑まで持つて行くことは致しませんが、天然自然の害に到りますと土地田畑まで洗ひざらい持つて行つてしまふのですから恐ろしいものです、尊德先生は親代々の六段八畝といふ田地を酒匂川の水の爲に二度まで持つて行かれてしまひました、百姓が土地を持つて行つてしまはれては、活きる足場がございません。百姓には限りませんけれど、そこであの方は、よそへ奉公を致しまして、ずい分辛い生活をなさいましたが、そのうちに、誰も捨てゝ顧みない荒地に菜種を蒔きました。なぜ菜種を蒔いたかと申しますると、それで油を搾りたかつたからでございます、ナゼそんなに油が欲しいかと申しますと、主人に油を惜しまれる爲に自分で油を取つて、それで夜の暇に本が讀みたかつたからでございます、然るに、どうでせう、五勺の菜種を蒔くと八升の菜種が取れました、これがあの方の地上から得た最初の收穫でございました。五勺の種が八升の收穫を與へました、そこで考へずには居られません、天地といふものは土地でも田畑でも情け容赦も無く奪うには奪うが、また與へる時には與へもするものだ、五勺の種子で八升の收穫は百六十倍の收穫でございます、この天地

の大きな力を、人間の手で最もよく利用厚生しなければならないといふことを、しみ〴〵と悟りましたのが、十六歳の時でございました、そこで、あの方は、本當に天地の力の中に飛び込んで働らくことの樂しみを體得いたしました。「菅もなく、香もなく常に天地は書かざる經をくりかへしつゝ」とあるのがその體でございまして、「天地の惠みつみ置く無盡藏、鍬で堀り取れ鎌で刈り取れ」と申すのがその用なんでございます。天地と抱合つて農を樂しむことが出來ました。すでにそれを樂しむことを悟りました以上は、その餘のことに苦しみといふものがあらふ筈はございません。「飯と汁木綿着物は身を助く、その餘は我をせむるのみなり」「その餘は我をせむるのみなり」といふところをよくお考へ下さいませ斯樣に申しますと、あなた方はまた必ず不服をおつしやるに違ひない、それは天地と云ふものは、かくの如く冷刻に奪ひもするが、またそのやうに豐富に與へもする、然るに人間の惡い政治になりますと、奪うばかりで與へるといふことをしない、搾り取るばかりで惠みといふものが更に無い――と斯うおつしやるに相違ございません、それは全くその通りでございます、さればこそ、論語にも苛政は虎より猛なりと記してございます、私とても

その恐ろしい人間の惡い政治を、天地の力と同樣に默從しなければならぬと申すのではございませぬ、それはそれでございます、惡政は人間力を極めて改める道責むる道を講じなければなりません、同時に人間には運命に樂しむ所以を知らしめないと、人間の心が片輪になるといふことを強く申上たいのでございます。今の世には百姓が卑しい、百姓がつまらない、百姓が利に合はない、百姓がいぢめられる、百姓ほど苦しいものは無いといふことのみが打ち込まれ、百姓ほど、貴いものはない、百姓ほど樂しいものはないといふ大きなる事實が敎へられて居らないのではないかと、私はそれを考へて居りますのでございます、わたくしが若し、五體が滿足に生み出されて居りましたならば、私は職業として何よりも農業を選んだに相違ないと存じますのでございます、先年私が秋田の方に參りました時……」

こゝで漸く、靑嵐居士が必死の勇を振つて食ひとめにかゝりました。

「もう解りました、大體わかりましたよ辨信さん、お前さんといふ人には全く降參しますおつしやることも尤もです、ですがね、天下の人は、皆大公望でもなければ諸葛孔明でもなし、二宮尊德でもございません、多くは其の日暮しの空腹の民なんです、彼等は德を持たず樂しみを知らない意氣地のない人間なんです、彼等が强者に對して立場を守らんとするには、多數團體の力を借りる外にはどうにもならんでせう——」

絕望的に靑嵐居士がかういふ言葉を投げつけて、お喋べり坊主の舌洪の鬪を食ひ留めにかゝりました。

四四

宇津木兵馬が驛者の輻松を連れての、白山白水谷に向つての一種異樣な道行は件の如くにして續きました。

その翌日の晩も亦、旅寢の假枕——この假枕が珍妙なる兼ね合ひで、女に押され〳〵ながら、土俵際の劍の峰で廻り込み廻り込み渡つて行く兵馬の足どり、それを女は結句面白がつて、只寄せに寄せて見たり、わざと土俵眞中へ逃げて見せたり、飜弄の手を日毎夜毎に用ひつくしてゐる、一方、兵馬に取つて見ると、これも亦、平常底の修行の一つだと觀

念をして相手になつてゐるらしい。
「隨分お固いことね、破れ傘のやうだわ、さすが修行の積んだものはエライはね、感心したげるわ」
とテレて見たかと思ふと
「でも、もう、こつちのものよ、いくらあなたが外々しくなさつても、要するに時の問題なのね、あなたの事實上の陷落は、兵を惜しまずに戰ひさへすれば、今日にも陷落させて見たげるわ、でも、それをわたしはしない、しないところが味なのよ」
と、もう占めてしまつたやうな事をいふ。
兵馬はそれに答へない、今晩も亦、形ばかりなる山小屋の中へ寢ました。
藝者の福松には、旅行用の合羽を手厚く着せて寢かせ、自分は、木を集めて火を焚いてそれを伽に、柱があれば柱、壁があれば壁によりかゝつて、しばしまどろむ。一方を横にさせて、自分は脊て横になるといふことをしないで終らうとする此の旅路——その邊は、旅に慣れた兵馬には、敢て苦とはならない。

だが、彼が惱まされるものは、此にあらずして彼にある。
女が寢返りをうつ度に、彼の心がひやりとする、その肩から、脊へかけて、露出した肌を、思ひきつて見せつけられるところへ、眞黒くふんだんな髮の毛がくんづほぐれつして亂れかゝる、その時に兵馬は戰くばかりの羞恥を感ずる、
それと、もう一つは、さういふ場合になると突然、彼の耳もとで
「はつ、はつ、はつ」
と、大きく笑ふ聲がする、それは尋常の笑ひ聲ではない、八分の冷笑と、三分の親しみを含んだ、遠慮のない高笑ひで
「はつ、はつ、はつ」
と笑はれるごとに、轉寢の夢が破れて、と見ると、そこに佛頂寺彌助が傲然として突立つてゐる、無論佛頂寺あるところの後ろには丸山勇仙の影が卽かず離れずにゐる。
「宇津木、旨くやつてるな」
ある晩の如きは、この佛頂寺が斯ういつて、大きく笑ひながら、ニヤ〳〵として現に眼

の前に寢てゐる醫者の福松の襟に手を突込もうとするところをまで夢に見て、本當に夢が醒めた時に、福松が、ほとんど裸體同樣な寢像になつてゐるのを見て、周章てゝ着物を押しかぶせてやつたが、押しかぶせてやつてもやつても、わざとするものゝやうに、その着物を引きはいでしまふ。

さういふやうな場合で、眼前に、女の肉體といふものを一つ柳下惠の試驗臺に借りてゐるのはいゝが、夜な〳〵襲はれる佛頂寺彌助、並びに丸山勇仙の幽靈ばかりは、兵馬も全く惱ませられる。

はつと、油斷すれば、もう佛頂寺彌助の亡靈が現はれて洪笑し、冷嘲し

「旨くやつてるな」

といふ、それともう一段油斷してゐると、佛頂寺そのものが、いよ〳〵氣味の惡い笑ひ方をして、寢てゐる女の肉體へ手をあてがはうとする、兵馬は、蠅を追ふやうに、それを拂うことをせざるを得ない。

今日は、ふとまた一つの山路を上りつめてゐる、上りつめて見下すと、廣い谷がある、道は蜿蜿としてこの谷を通して北へ貫くのであつて、隱れてまた見え出す、その大道の彼方を見ると、眞白な山が、峨々として、雪を戴いて聳えてゐる。

「うむ、成程、あれが白山だな」

と兵馬は、山路の上に立つて、遙かに山上を見上げてゐると、例によつて

「はつ、はつ、はつ」

といふ底冷えのした洪笑につゞいて、

「なあに、ありや齋生谷だよ」

「えッ」

見れば、もう、いつの間にか、佛頂寺彌助が後ろから自分の面をのぞき込みながら、

「はつ、はつ、はつ、旨くやつてるな」

四五

「何だ、佛頂寺」

「はつ、はつ、はつ、旨くやつてやがら、あれが、白山なものか、下を見ろ、畜生谷だ」
兵馬が上をのみ仰いでゐるのに、佛頂寺は意地悪く下を指しました。
佛頂寺に指さゝれて見ると、兵馬は、白山をのぞむ眼をうつして畜生谷を見ないわけには行きません。
先夜の夢で見たやうな深い谷である、あれより摸糊としてさうして廣い、木の間を透して見ると、なか〳〵大きな構の家の屋根が三々五々と散在してゐる、山間の一大部落であることが、よくわかる。
「うーん」
「どうだ、見えたか」
「見えたよ、あれが有名な畜生谷か」
「さうだとも、宇津木、君の爪先のつん向いた方へ行けば、あの畜生谷より外へ行く道はないんだぜ、その足どりで、白山なんぞ覺束ねえ」
「だつて、白山へ行くには、この谷をつつきつて行くより外に道が無いぢやないか」

「そんな眼玉だからいかん、白山へ行く道は、外にあるよ、探がして見たまへ、探がしてから無けりや自分で造つて行つて見給へ」
「冗談いふな——君、知つてるなら教へてくれ」
「はつ、はつ、はつ、俺りや最初から、白山の頂なんぞを目標に置いとらん、畜生谷へ行くつもりでやつて來たんだから、そんな道は知らん」
「さうか、併し、道はこの通り立派について、蜿々として帶をめぐらしたやうに、一旦はあの谷、あの部落を貫通して、それから向ふの峠へ拔けるやうについてゐる、他に道が無い限り、これより外へは行けやうはないから、君が何といはうとも、わしは此の道を突破する」
「出來るものならばやつて見給へ」
「畜生谷を通過したからとて、身が畜生になるわけではあるまい、もしさうだとすれば、狼谷を通れば狼に食はれ、磨針峠を通れば自分の身が針になる」
「宇津木、小理窟をいふなよ、おれは、親切でもつてお前にこの道を通るなと忠告をして

ゐるんだ、いや、通るとや、通るまいとも、それはお前の勝手といふものだが、この谷を通ることによつて、あの雲を戴く、白山の上へは出られないといふことだけを、おれは明言してゐるのだ、いかにも、お前の云ふ通り、畜生谷を通つたからとて、身が畜生になるわけではないが、白山へ行くのとは道が違ふといふことだけを云つて聞かせてゐるのだ」

「忠告は有難う、併し、君といふ人間の忠告が一から十まで、聽從出來るものとも考へられない」

「はつ、はつ、はつ、以前から信用のないこと夥しい、では、夜の明けない足許の暗いうちに、佛頂寺は引込むよ」

「まあ、もう少し待ち給へ」

「いや、さうしては居られん、今、佛頂寺のゐるところは、世界が違うからな、鷄でも鳴き出したら最後だ、まあ、足許の暗いうちになあ、丸山、お暇とやらかさう」

「さうだ、おい、宇津木、用心しろよ」

「どうしても歸るのか」

「歸るよ、宇津木、ぢやあ、失敬！」

「さうか」

「はつ、はつ、はつ、旨くやつてやがら」

「お樂しみ……」

斯うして、佛頂寺彌助と、丸山勇仙が、雲の中へ姿を隱してしまひました、その途端に醒めて見ると夜風が外でさわぐ、女はと見れば、又しても、だらしない寢像、折角被せてやつた衣類を意地のやうにふんばいて、二目とは見られない。

苦りきつた兵馬は、立つてまた衣類をかぶせてやつてゐると、何處かの空で、成程鷄が鳴き出してゐる。

四　六

それから、また、旅にかゝつて、女をいたはり〳〵行くと、間もなく一つの山路に出ました、四五町の登り、大した崖といふではなかつたが、山路の上に立つて見ると、昨夜の

夢を思ひ起さゞるを得ない。

佛頂寺と、丸山から指された峠の谷を思ひ起さないわけには行かない、何も、この峠が夢に見た峠と寸分違はないといふやうな神仙譚にありさうな光景を想像するのではない、昨晩の夢とは大分趣きが違つてゐて、周圍は無論、山又山だが、別に加賀の白山らしいものが雪を戴いた頂を高く拔いてゐるのではない、峠の下の行手は谷になつて部落の屋根が三々五々に見おろせることだけは、夢と符牒を合せてゐるやうなものだが、それとても今日までの旅行に有り來りの光景であつて、山と谷との間を旅をする者は、何處へ行つても誰人も經驗する道程に過ぎない、それでも兵馬は思ひ合はされて、異樣な感じに襲はれながら、女の足をいたはつて、そこで、暫しの休息をやりますと、

「ねえ、宇津木さん、わたし、また怖い夢を見ちやいましたよ、佛頂寺の夢を」

「うむ、佛頂寺の夢をか」

「どうして、また、毎晩佛頂寺の夢ばかり見るんでせうね」

「お前もか」

「では、宇津木さん、あなたも毎晩、佛頂寺の夢をごらんになるのですか」

「さうだよ、實は、あれから、毎晩のやうに佛頂寺に關する夢ばかり見せられてるんだが愚にもつかないから默つてゐたよ」

「さうでしたか、わたしも、あれから、しよつちう佛頂寺の夢ばつかり、やつぱり恨まれてゐるんだわね」

「うむ」

「恨まれてゐるのよ、あんな、しつつこい人に恨まれちや、やりきれないわよ」

「だが、佛頂寺が、さう我々を恨まなけりやならん筋は無い——また、佛頂寺としても、みだりに執念を殘すやうな往生ぎわの惡い男でも無い筈だ」

「だつて、人間の心持といふものはわからないわ」

「こつちこそ、佛頂寺に多大の迷惑を蒙らせられてこそ居れ、あれに逆さ恨みをされる覺えは無いのだが、强いて云へばあの小鳥峠の時、ろく〳〵謝ひもしてやらないで、見捨てゝ來たのが不人情といへば云はれるか知れないが、それは、事情やむを得ない事でもある

し、彼が死んでからの事だから、怨みとして記憶される筈はない」
「でも、佛頂寺は、何か、あなたの知らない事であなたを恨んでゐるかも知れないわ」
「いゝや　わしには今云ふ通り彼を恨まうとも、彼に恨まれる筋は微塵も無いのだが、君の方には大いに恨まれる筋があるかも知れない」
「あら、しどいわ、佛頂寺なんかに恨まれる筋は無くつてよ」
「そりや、自分は無いと思つても、先方にあるかも知れない」
「あら、しつぺ返しをおつしやるわ、佛頂寺なんかに恨まれる筋は、わたし毛頭ないわ、佛頂寺を恨む筋はあるか知れないが……誰かの口眞似よ、お氣の毒さま」
「ふゝん、さうは云はせない、第一この間の小鳥峠にしてからが、わしは一通り介抱して見て、差當りの手數で、出來るだけ親切に辯つてやらうとしたのを、人が來るとあぶないからといつて、強いて、それをわしにさせなかつたのは誰だ、だから、あの時の怨念が殘るとすれば、拙者につかないで、君の上に取りつくのが當然だ」
「あら怖い——あんなことで、佛頂寺の怨念に取りつかれちやあ、全くやりきれませんね

へ、あれは、あの場合、そんな人情づくにからまれてゐてはお互樣があぶないから、やむを得ないわ、わたしが佛頂寺を憎いと思ふのはそれより以前のことなのよ」
「それより以前に、君は何か佛頂寺に憎まれるやうな事をしたのか、また佛頂寺を憎むやうな罪を作つたのか」
「知らないわ——そんな事、あなたが一ばんよく知つておゐでの癖に」
「はて、君といふ女が、佛頂寺に憎まれるやうな事をした、佛頂寺を憎むやうなことをしたといふことを、どうして拙者が知つてゐる」
「まだ、あんな知らを切つてゐらつしやる、それは、あなたの外には誰も御存じない事なのよ」
「はて、拙者は一向心當りがないがな、一たい佛頂寺は君といふ女をそれほど憎んでゐたのか」
「お氣の毒樣、憎みは愛の變形なりつて唐人町の儒者が申しました」
「何、憎みは愛の變形？」

「はい、愛のないところに憎みはない、憎みのあるのは愛のある證據でありますとさ」
「むづかしいことを云ひ出したね。して見ると、君を憎んでゐた佛頂寺は、君を愛してゐたといふ理窟になり、佛頂寺を憎み返す君はまた、佛頂寺を……」
「そんな事知らない〳〵、わたしを佛頂寺に憎まれるやうにしたのは一體誰れです」
と云つて、女は不意に兵馬の股をつねりました。

四七

さういふ不意打には兵馬も今は慣れてゐる、そこで、痛いつと云つて、手を振り拂うやうな事はしない、却つて
「ふーん」
と深く考へ込みました。
「佛頂寺といふ男は、あれでひどく、わたしに惚れてたんですから可笑しいわ、あゝいふ人ですから、惚れたとか、腫れたとかいふことは顏色には現はれませんでしたけれど、ひどく、わたしが好きになつてしまつたのが、運の盡きでしたねえ、そこで、ねえ、宇津木さん、誰れでも惚れた以上は、きつと嫉くんですね、あれから佛頂寺が嫉き手に廻つたのを、あなた御存知」
「そんなことを知るものか」
「つまり、佛頂寺があれから、私とあなたといふ者の中を嫉くことゝいつたら、とても黒焦げなんですけれど、あゝいふ男ですから、顏には現はれません」
「そんな馬鹿なことがあるものか、そりや君の己惚れで、女といふ奴は世界の男が皆んな自分に惚れてゐると考へたがるものだよ、佛頂寺は、傷だらけの人間だが、女に參つて、やきもきするやうな男ぢやないよ、第一君と拙者との間を嫉くといふのが可笑しいぢやないか、何でも無い間柄の事を、嫉妬すべき理由が無いぢやないか」
「そりや仕方がありません、邪推でも何でも、嫉くのはあちら樣、嫉かれるのは此方なんですから、さうして、こちら樣にだつて嫉かれて恐い筋が無いとばつかりは云はれませんね」

「それは無いよ、佛頂寺に二人の間を嫉かれるやうな弱身は拙者に於ては毛頭ありはしないよ、當て違ひだよ」
「弱身が無いとばつかりは云へません、あなたにはなくとも、わたしの方にあつたら、どういたします」
「君は、そんなに何か佛頂寺に對して弱身があつたのかな」
「佛頂寺に對しては、ございませんが、誰れかに對してありました」
「誰に」
「誰にですか、佛頂寺を好かないほどの強さでわたしは、誰れかを好きでした、佛頂寺を嫌ひながら、その人には惚れてたんです、ですから佛頂寺に恨まれるのは、あたりまへでせう」
「そんなことは拙者は知らん、まあ、歩きながらゆつくり聞くとしよう」
「では、手つとり早く話してしまひませう、つまり、佛頂寺はあなたとわたしの仲をしよつちう嫉いてゐたのです、昨夜もその恨みを云ひに、わたしの枕許へ參りました、さうして忌らしい身ぶりをしては、お樂しみだの、旨くやつてやがらあだの、散々忌味を並べて行きました」

「つまらん事だ」
「ねえ、宇津木さん、全くつまらないわ、何かあるんなら、有るやうに嫉かれても仕方がないけれど、斯うして清い旅をしてゐるのに、嫉かれちや全くつまらない！」
「佛頂寺といふ奴も馬鹿な奴だな、第一、拙者の手から、君といふものを奪つて行つて、いゝやうにしたのは彼ぢやないか、こつちに恨みの筋はあらうとも……」
「それはいけません、それをあなたがおつしやれば、わたしは佛頂寺を憎むより一層あなたといふものを憎まなければなりません、あの時の罪は、佛頂寺よりあなたの方が十倍も上なんです」
「でも、あれから、君は佛頂寺にいゝやうにされた上に……」
「何をおつしやるのです、わたしが好き好んで佛頂寺にいゝやうにさせたとおつしやるのですか、それはお間違ひではございませんか、纖弱いわたしを振り捨てゝ、あの人達の手

にいゝやうにさせた憎い人は誰れでせう、中房から松本へ出る、あの道中の誰かの不人情がわたしは生涯忘れられません、その生涯忘れられない思ひが、宇津木さん、あなたに一生祟るから、こればつかりはよく覺えてゐらつしやい」

「怖い事をいふな」

「あなたはわたしが佛頂寺にいゝやうにされたとおつしやいましたね、そのいゝやうにといふのは、どういふやうにされたのですか、それを承りたいものですね、どうせ旅から旅の藝者かせぎの事ですから、世間樣へ通る操がどうのかうのとは申ませんが、あの時は、佛頂寺を憎いと思ふよりは、あなたを心から憎いと思ひました、今でもあの時の事を考へ出すと、憎い！」

痴話も嵩ずると眞劍になることがある、あぶない、その時、行手の谷間からがや〳〵と人の聲があつて、こちらを目がけて悠長に登つて來る、そこで人心ついた二人は、痴話喧嘩もそつちのけで急いで外行の旅人氣分を取りつくろつて立ち上りました。

四八

間もなく、こゝへ現はれて來たのは、珍らしく兩刀を帶びた檢見衆らしいのが二人、間竿を旗差物のやうに押立てさせた從者と人夫と都合七八人の一行でありました。

こちらは豫期してゐたことだが、先方は意外に感じて、一度にこちらを注視しましたが、女であり若さむらひである、さのみ、うろんなものゝ風體ではないから、得心が行つたやうにして近づいて、お互に挨拶をして、見ると、この檢見衆らしいさむらひの老人の方が案外氣さくでありまして、

「あなた方、どちらへ行かつしやる」

と兵馬にたづねたものですから、兵馬が、

「北陸筋へ罷り通りたいと存じます」

「それは〳〵、用心して行かつしやれ」

「この谷を通つて、加賀の白山、あるひは金澤方面へ出られますか」